



袖珍
名文集覽

東京
會社
富山
房
發
兌



珍袖

名文集覽



明治

39 8 27

内交

特62
372

袖珍名文集覽

(1)

例言

- 一、名文集覽は、國文學上の名篇佳什、それに漢詩漢文中の粹を加味したものである。
- 二、材料は、文學上特に吟誦の値あるものと、普く人口に膾炙してゐるものとを標準として選んだ。
- 三、今日の時代思想と餘りに隔絶したものや、趣味の餘りに下劣なものは省くことにした。
- 四、順序は、時代と、種類と、内容の連絡とにより、詩は邦人のを先に、漢人のを後にした。
- 五、毎篇の題目は、書名を其まゝ出したものもあり、書中の題目を取つたものもあり、編者が假に附けたものもある。

明治三十九年六月

編者識

(1)

名文集覽

目次

散文之部

祈年祭祝詞	………	(祝詞式)	………	一頁
大祓祝詞	………	(同)	………	八頁
國引の傳説	………	(出雲風土記)	………	一二頁
古今和歌集序	………	(紀貫之)	………	一三頁
同 漢文	………	(紀淑望)	………	二三頁
伊勢物語	………	(在原業平)	………	二八頁
土佐日記	………	(紀貫之)	………	三三頁

枕草子……………(清少納言)……………三四頁

方丈記 其一、其二……………(鴨長明)……………三五頁

十六夜日記……………(阿佛尼)……………四〇頁

徒然草 其一乃至其五……………(兼好法師)……………四四頁

重盛の諫言……………(源平盛衰記)……………五〇頁

薩摩守忠度……………(同)……………六〇頁

那須與一扇の的……………(同)……………六四頁

宇治川の先陣……………(同)……………七二頁

靜の舞曲……………(吾妻鑑)……………八八頁

空ゆく雁……………(曾我物語)……………九一頁

重衡卿の海道下り……………(平家物語)……………九四頁

笠置山……………(太平記)……………九七頁

俊基朝臣東下り……………(同)……………一〇〇頁

大塔宮熊野落……………(同)……………一〇四頁

吉野合戦……………(同)……………一〇七頁

櫻井訣別……………(同)……………一二二頁

最期の参内……………(同)……………一二四頁

熊王發心……………(吉野拾遺)……………一六頁

祭のことば……………(村田春海)……………一二一頁

水蓼……………(萩原廣道)……………一二五頁

芳流閣上の格闘……………(八犬傳)……………一三三頁

爲朝白峰の陵に詣つ……………(弓張用)……………一三九頁

一寸法師……………(御伽草子)……………一四二頁

貧梵國……………(夢想兵衛)……………一四九頁

(4)

袋の贊	……………(横井也也)	一四九頁
木履説	……………(同)	一四九頁
そこのけ釜	……………(十遍舎一九藤栗毛)	一五一頁
高砂節録	……………(詠曲)	一五五頁
安宅	……………(同)	一五七頁
寺子屋	……………(菅原傳授手習鑑)	一六五頁
政岡忠義	……………(伽羅先代萩)	一六五頁
別れの盃	……………(繪本太閤記)	一六七頁
夕顔棚	……………(同)	一六八頁

韻文之部

神武天皇御製	二首……………(日本書紀)	一七一頁
--------	---------------	------

過 _二 近江荒都 _一 時作歌	……………(柿本人麿)	一七二頁
望 _二 不盡山 _一 歌	……………(山部赤人)	一七三頁
詠 _二 不盡山 _一 歌	……………(作者不詳)	一七四頁
不二山短歌	六首……………(契仲、長流、真淵、枝直、尊孫、有功)	一七七頁
思 _二 子等 _一 歌	……………(山上憶良)	一七七頁
賀 _二 陸奥國出 _一 金詔書歌	……………(大伴家持)	一七七頁
喩 _二 族 _一 歌	……………(同)	一八〇頁
陳 _二 防人悲 _一 別之情 _一 歌	……………(上毛野君)	一八四頁
詔王昭君歌	……………(村田春海)	一八六頁
擬 _二 送 _一 留學生 _一 歌	……………(同)	一八八頁
催馬樂	一首……………	一九〇頁
短歌	附道歌、連歌……………	二〇一頁

袖珍名文集覽

散文之部

祈年祭

(祝詞式)

集侍神主祝部等諸聞食登宣。(神主祝部等共稱唯餘宣)

准此高天原爾神留坐皇睦神漏伎命神漏彌命以天社

國社登稱辭竟奉皇神等能前爾白久。今年二月爾御年初

將賜登爲而皇御孫命能宇豆能幣帛乎朝日能豐逆登爾

稱辭竟奉久登宣。

御年皇神等能前爾白久。皇神等能依左志奉牟奧津御年乎、

前出師表	歸去來辭	前赤壁賦	漢詩附摘句	唱俚歌	川柳	俳句	狂歌
.....
二四六頁	二四四頁	二四一頁	二二三頁	二一三頁	二〇八頁	二〇四頁	二〇二頁

手肱爾水沫畫垂、向股爾泥畫寄氏、取作牟奧津御年乎、八
 束穗能伊加志穗爾、皇神等能依左志奉者、初穗乎波、千穎
 八百穎爾奉置氏、碓閉高知碓腹滿雙氏、汁爾母穎爾母稱辭
 竟奉牟。大野原爾生物者、甘菜辛菜、青海原住物者、鰭能
 廣物鰭能狹物、奧津藻菜邊津藻菜爾至氏爾、御服者、明妙
 照妙和妙荒妙爾稱辭竟奉牟。御年皇神能前爾、白馬白猪
 白鷄、種種色物乎備奉氏、皇御孫命能宇豆乃幣帛乎、稱辭
 竟奉久登宣。

大御巫能辭竟奉、皇神等能前爾白久。神魂、高御魂、生魂、
 足魂、玉畱魂、大宮乃賣、大御膳都神、辭代主登、御名者

白而辭竟奉者、皇御孫命御世乎、手長御世登、堅磐爾常磐
 爾齋比奉、茂御世爾幸閉奉故、皇吾陸神漏伎命、神漏彌
 命登、皇御孫命能宇豆乃幣帛乎、稱辭竟奉久登宣。
 座摩乃御巫乃稱辭竟奉、皇神等能前爾白久。生井、榮井、津
 長井、阿須波、婆比支登、御名者白氏辭竟奉者、皇神能敷
 坐、下都磐根爾宮柱太知立、高天原爾千木高知氏、皇御
 孫命乃瑞能御舍乎仕奉氏、天御蔭日御蔭登隱坐氏、四方
 國乎安國登平久知食須我故、皇御孫命能宇豆乃幣帛乎、稱
 辭竟奉久登宣。

御門能御巫能稱辭竟奉、皇神等能前爾白久。櫛磐間門命、

豐磐間門命登、御名者白氏、辭竟奉者、四方能御門爾。湯
 都磐村能如塞坐氏、朝者御門開奉、夕者御門閉奉氏、疎
 夫雷物能、自下往者下乎守、自上往者上乎守、夜能守日能
 守爾守奉故、皇御孫命能宇豆乃幣帛乎、稱辭竟奉久登宣。
 生島能御巫能辭竟奉、皇神等能前爾白久。生國、足國登、御
 名者白氏辭竟奉者、皇神能敷坐島能八十島者、谷蟻能狹
 度極、鹽沫能雷限、狹國者廣久、峻國者平久、島能八十島
 墮事無、皇神等能依左志奉故、皇御孫命能宇豆乃幣帛乎、
 稱辭竟奉久登宣。

辭別、伊勢爾坐、天照太御神能大前爾白久。皇神能見霽志

坐四方國者、天能壁立極、國能退立限、青雲能靄極、白雲
 能墜坐向伏限、青海原者棹柁不干、舟艦能至雷極、大海
 原爾舟滿都都氣氏、自陸往道者荷緒縛堅氏、磐根木根履
 佐久彌氏、馬瓜至雷限、長道無間久立都都氣氏、狹國者
 廣久、峻國者平久遠國者八十綱打挂氏引寄如事、皇太
 御神能寄奉波、荷前者、皇太御神能大前爾、如橫山打積置
 氏、殘乎氏平聞看、又皇御孫命御世乎、手長御世登、堅磐爾
 常磐爾齋比奉、茂御世爾幸閉奉故、皇吾睦神漏伎神漏彌
 命登、宇事物頸根衝拔氏、皇御孫命能宇豆乃幣帛乎、稱辭
 竟奉久登宣。

御縣爾坐、皇神等前爾白久。高市、葛木、十市、志貴、山邊、會布登、御名者白氏、此六御縣爾生出、甘菜、辛菜、持參來氏、皇御孫命能長御膳能遠御膳、聞食故、皇御孫命能宇豆乃幣帛乎、稱辭竟奉久登宣。

山口坐、皇神等能前爾白久。飛鳥、石村、忍坂、長谷、畝火、耳無登、御名者白氏、遠山、近山、爾生立、大木、小木乎、本末打切氏、持參來氏、皇御孫命能瑞能御舍仕奉氏、天御蔭日御蔭登、隱坐氏、四方國乎、安國登、平久知、食須我故、皇御孫命能宇豆乃幣帛乎、稱辭竟奉久登宣。

水分坐、皇神等能前爾白久。吉野、宇陀、都祁、葛木、登、御名

者白氏、辭竟奉者、皇神等能寄志奉、奥都御年乎、八束穗能伊加志穗、爾寄志奉者、皇神等爾、初穗波、穎爾母汁、爾母、噠閉高知、噠腹滿、雙氏、稱辭竟奉氏、遺乎波、皇御孫命能、朝御食夕、御食能加牟加比爾、長御食能遠御食登、赤丹穗、爾聞食故、皇御孫命乃宇豆乃幣帛乎、稱辭竟奉久乎、諸聞食登宣。

辭別、忌部能弱肩爾、太多須支取挂氏、持由麻波利仕奉禮、幣帛乎、神主祝部等受賜氏、事不過棒持奉登宣。

六月 大祓祝詞

(祝詞式)

集侍親王諸王諸臣百官人等諸聞食止宣。天皇朝廷爾
 仕奉爾比禮挂伴男手禰挂伴男靴負伴男劔佩伴男
 伴男乃八十伴男乎始氏官官爾仕奉留人等乃過犯家牟雜
 雜罪乎今年六月晦之大祓爾祓給比清給事乎諸聞食止
 宣。

高天原爾神留坐皇親神漏岐神漏美乃命以氏八百萬神
 等乎神集集賜比神議議賜氏我皇御孫之命波豐葦原乃
 水穗之國乎安國止平久知所食止事依志奉伎如此依志奉
 志國中爾荒振神等乎波神問志爾問志賜神掃掃賜比氏語

問志磐根樹立草之垣葉乎毛語止氏天之磐座放天之八
 重雲乎伊頭乃于別爾千別氏天降依志奉支如此久依左志
 奉志四方之國中登大倭日高見之國乎安國止定奉氏下
 津磐根爾宮柱太敷立高天原爾千木高知氏皇御孫之命
 乃美頭乃御舍仕奉氏天之御蔭日之御蔭止隱坐氏安國止
 平氣久所知食武國中爾成出武天之益人等我過犯家牟雜
 雜罪事波天津罪止八畔放溝埋樋放頻蒔串刺生剩
 逆剩屎戶許許太久乃罪乎天津罪止法別氣氏國津罪
 止八生膚斷死膚斷白人胡久美(中略)昆虫乃災高津
 神乃災高津鳥災畜仆志蠱物爲罪許許太久乃罪出武。

如此出波、天津宮事以氏、大中臣、天津金木乎、本打切未
 打斷氏、千座置座爾置足波志氏、天津菅會乎、本刈斷未刈
 切氏、八針爾取辟氏、天津祝詞乃太祝詞事乎宣禮。如此久
 宣良波、天津神波、天磐門乎押披氏、天之八重雲乎、伊頭乃
 千別爾、千別氏所聞食武。國津神波、高山之末、短山之末、爾
 上坐氏、高山之伊穗理、短山之伊穗理乎撥別氏所聞食武。
 如此所聞食氏波、皇御孫之命乃朝廷乎始氏、天下四方國
 爾波、罪止云布罪波不在止、科戶之風乃天之八重雲乎吹放
 事之如久、朝之御霧夕之御霧乎、朝風夕風乃吹掃事之如
 久、大津邊爾居大船乎、舳解放、舳解放、大海原爾押放事

之如久、彼方之繁木本乎、燒鎌乃敏鎌以氏打掃事之如久、
 遺罪波不在止、被給比清給事乎、高山之末、短山之末、與里、
 佐久那太理爾、落多支都速川能瀬坐須、瀬織津比咩止云
 神、大海原爾持出奈武。如此持出往波、荒鹽之鹽乃八百道
 乃、八鹽道之鹽乃八百會爾座須、速開都比咩止云神、持可
 可吞氏牟。如此久可吞氏波、氣吹戶坐須氣吹戶主止云
 神、根國底之國爾氣吹放氏牟。如此久氣吹放氏波、根國底
 之國爾坐、速佐須良比咩登云神、持佐須良比失氏牟。如此
 久失氏波、天皇我朝廷爾仕奉留、官官人等乎始氏、天下四方
 爾波、自今日始氏、罪止云布罪波不在止、高天原爾耳振立聞

物止、馬牽立氏、今年六月晦日夕日之降乃大祓爾祓給比
モント ヤマヒキタテ、コトシンミナツキニツギモリンエフヒンヒン クダチン オホハラヒニハラヒタマヒ
 キヨメタマンコトナ モロクキコシメセトナル ヨ クニシラベ トモ オホカハチニモチマカリイデテハラヒ
 清給事平諸聞食止宣。四國下部等、大川道爾持退出氏祓
 却止宣。

國引の傳説

(出雲風土記)

國引させせる、八束水臣津野命の詔りたまはく、八雲立つ出雲の
 國は、さぬのわかうつ國たるかも、初國小さく作らせり。かれ、作
 り縫はむと詔りたまひて、たくぶすましらさの三崎を、國の餘り有
 りやと見たまへば、國の餘り有りと詔りたまひて、童女のいみすき
 取らして、大魚のきた衝き別けて、はたすすき、穗振り別けて、三
 身の綱打ちかけて、しもつづらへなへなに、河船のもそろもそろに

國來國來と引き來、縫へる國は、こづのさきより絶ちて、八穗にき
 つきの御埼なり。こをもて堅め立てる加志は、石見の國と出雲の國
 との堺なる、名は佐比賣山これなり。

古今和歌集序

(紀貫之)

やまと歌は人の心を種として、よろづの言の葉とをなれりける。
 世の中にある人、事わざしげきものなれば、心に思ふことを、見る
 もの聞くものにつけていひ出せるなり。花に啼く鶯、水に棲むかは
 づの聲を聞けば、生さとし生けるもの、孰れか歌を詠まざりける。
 力をも入れずして天地を動かし、目に見えぬ鬼神をも哀と思はせ、
 男女の中をも和らげ、猛き武士の心をも慰むるは歌なり。この歌天

地の開け治まりける時より出できにけり。然はあれども、世に傳はる事は、久方の天にしては、下照姫に始まり、荒金の地にしては、須佐の雄の尊よりぞ起りける。千早ぶる神代には、歌の文字も定まらず、すなほにして、ことの心分さがたかりけらし。人の世となりて、須佐の雄の尊よりぞ三十もじあまり一もじは詠みける。かくてぞ花を愛で、鳥を羨み、霞を憐ひ、露を悲しぶ心、言葉多く様々になりにける。遠き所も出て立つ足もとより始まりて年月を渡り、高き山も麓の塵ひぢよりなりて、天雲た靡くまで生ひのほれる如くに、この歌もかくの如くなるべし。難波津の歌は帝のちほむ始なり。安積山の言の葉は。采女のたはぶれよりよみて、この二歌は、歌の父母の様にぞ、手習ふ人の始にもしける。そもく歌のさま六つなり。唐のうたにもかくぞあるべき。その六くさの二つには、そへ

歌。

大さしぎの御門を、そへたてまつれるうた。

難波津にさくやこの花冬ごもり今は春べとさくやこの花
といへるなるべし。

二つにはかぞへ歌。

咲く花に思つくみの味氣なさに身に疾病のいるも知らずて
といへるなるべし。

三つにはなすらへ歌。

君にけさ朝の霜のあきていなば戀しき毎にさえや度らむ
といへるなるべし。

四つにはたとへ歌。

我戀はよむとも盡さじ荒磯海の濱の真砂はよみ盡すとも

といへるなるべし。
いつにはたゞごとうた。

偽のなき世なりせばいかばかり人の言のは嬉しからまし
といへるなるべし。

六つにはいはひ歌。

此殿はむべもとみけりさき草のみつばよつばに殿造せり

といへるなるべし。今の世の中、いふにつき、人の心花になりにつけ
るより、あだなる歌、はかなきことのみ出でくれば、色ごのみの家に、
埋木うもれぎの人知れぬ事となりて、まめなる所には、花薄すくき、穂ほに出すべき
事にもあらずなりにたり。その始をおもへば、かゝるべくなむあら
ぬ。古の代々の帝、春の花のあした、秋の月の夜毎に、侍ふ人々を召
して、事につけつゝ歌を奉らしめたまふ。あるは花を戀ふとて、た

よりなき所に惑ひ、あるは月を思ふとて、しるべなき闇にたどれる
心々を見たまひて、さかし、おろかなりと知ろしめしけむ。然しかある
のみにあらず、さゞれ石にたとへ、筑波山にかけて君を願ひ、よろ
こび身に過ぎ、たのしみ心に餘り、富士の煙によそへて人を戀ひ、
松虫のねに友を忍び、高砂、住の江の松も相生のやうに覚え、男山
の昔を思ひ出で、女郎花の一時をくねるにも、歌をいひてぞなくさ
めける。又春のあしたに花の散るを見、秋の夕暮に木の葉の落つる
を聞き、あるは年毎に鏡の影に見ゆる雪と浪とを歎き、草の露、水
の泡を見て、わが身を驚き、あるは昨日は榮えおごりて、今日は時
を失ひ、世にわび、親しかりしも疎くなり、あるは松山の浪をかけ、
野中の水をくみ、秋萩の下葉をながめ、曉しきの鳴の羽根搔をかぞへ、
あるは吳竹のうき節を人にいひ、吉野川を引きて世の中を恨み來つ

るに、今は富士の山も煙立たずなり、長柄ながらの橋もつくるなりときく人は、歌にのみぞ心を慰めける。古よりかく傳はるうちにも、奈良の御時おんときよりぞ廣まりにける。かのおほむ世や歌の心を知ろしめしたりけむ。かの御時に柿本の人麿なむ歌の聖ひじりなりける。これは君も人も身を合せたりといふなるべし。秋の夕べ、龍田川に流るゝ紅葉をば、帝の御目には錦と見給ひ、春のあした、吉野山の櫻は、人丸が心には雲かとのみなむ覺えける。又山部の赤人といふ人ありけり。歌にあやしくたへなりけり。人丸は赤人がかみにたゝむ事難く、赤人は人丸がしもに立たむ事難くなむありける。この人々をおきて、又すぐれたる人も、吳竹のよゝに聞え、片糸のよりくゝに絶えずぞありける。こゝに古の事をも、歌の心をもしれる人、僅に一人二人なりき。然しかあれど、これかれ、得たる所、得ぬ所、互になむある。今

この事をいふに、司位高き人をば、たやすきやうなればいれず。その外に近き世にその名聞えたる人は、すなはち、僧正遍昭は、歌のさまは得たれども、誠すくなし。たとへば繪にかける女を見て、徒に心を動かすが如し。在原業平は、その心餘りて、言葉足らず。しぼめる花の色なくて、匂残れるが如し。文屋康秀は、言葉は巧にて、そのさま身に負はず。いはゞ、あき人のよき衣着たらむがごとし。宇治山の僧喜撰は、言葉幽かにして、はじめをはり確ならず。いはゞ、秋の月をみるに、曉の雲にあへるがごとし。よめる歌、多く聞えねば、彼此を通はして、よく知らず。小野小町は、古の衣通そとほりひめ姫のながれなり。哀なるやうにて強からず。いはゞ、よき女の惱める所有るに似たり。(強からぬは女の歌なればなるべし。)大伴黒主は、そのさま卑し。いはゞ、薪負へる山人の、花の蔭に休めるがごとし。こ

のほかの人々、その名きこゆる、野べに生ふるかづらのはい廣どり、
 林に茂き木の葉の如くに多かれど、歌とのみ思ひてそのさましらぬ
 なるべし。かゝるに今すべらぎの天あめの下しろしめす事、四つの時九
 かへりになむなりぬる。普さおほむうつくしみの浪、八島のほかま
 で流れ、廣さおほむ惠の蔭筑波山の麓よりも茂く坐おほしまして、萬の
 政をさこしめす暇、もろくの事を捨てたまはぬあまりに、古の事
 をも忘れじ、舊りにし事をも起したまふとて、今もみそなはし、後
 の世にも傳はれとて、延喜五年四月十八日に、大内記紀友則、御書
 所どころの預紀貫之、前甲斐のさう官凡河内躬恒、右衛門の府生壬生忠岑
 らにおほせられて、萬葉集に入らぬ古き歌、みづからのをも奉らし
 め給ひてなむ、それがなかにも、梅をかざすよりはじめて、郭公を
 聞き、紅葉を折り、雪を見るにいたるまで、又鶴龜につけて君を思

ひ、人をも祝ひ、秋萩夏草を見て妻を戀ひ、逢坂山にいたりて手向
 を祈り、あるは春夏秋冬にもいらぬくさくの歌をなむ撰ばせたま
 ひける。すべて千歌はた巻、名づけて古今和歌集といふ。かくこの
 たび集め撰ばれて、山下水の絶えず、濱のまさごの數多くつもしりぬ
 れば、今はあすか川の瀬になる恨も聞えず、さゞれ石のいはほとな
 るよろこびのみぞあるべき。それ、まくら(まろら)こと葉は春の
 花にほひすくなくして、空しき名のみ秋の夜の長さを啣かたてれば、且
 は人の耳におそり、且は歌の心に恥ぢ思へど、たなびく雲の立居、
 鳴く鹿のおきふしは、貫之らがこの世に同じく生れて、この事の時
 にあへるをなむ喜びぬる。人麻呂なくなりになれど、歌のこと留ま
 れるかな。たとひ時うつり事去り、たのしひい、かなしひい行きかふと
 も、この歌のもじあるをや。青柳の糸絶えず、松の葉の散りうせず

して、まさきのかづら長く傳はり、鳥の跡久しく留まれらば、歌の
さまをもしり、ことの心をも得たらむ人は、大空の月を見るがごと
くに、古を仰ぎて、今を戀ひざらめかも。

入雲たつ、いづも八重垣、妻ごめに、

八重垣つくる、其八重垣を。

難波津に咲くや木の花冬こむり、

今を春べとさくや木の花。

浅香山影さへ見ゆる山の井の、

あさき心は我が思はなくに。

古も今もかはらぬ世の中に、

こゝろの種をのこす言の葉

細川幽齋

歌よみは下手こそよけれ天地の、

動き出してはたまるものかは。

手をついて歌申上くる蛙かな。

宿屋飯盛

山崎宗鑑

古今和歌集序

(紀 淑 望)

夫和歌者、託其根於心地、發其花於詞林者也。人之在
世、不能無爲。思慮易遷、哀樂相變。感生於志、詠形
於言。是以、逸者其詞樂、怨者其吟悲。可以述懷、可以
發憤。動天地、感鬼神、化人倫、和夫婦、莫宜於和歌。
和歌有六義。一曰風、二曰賦、三曰比、四曰興、五曰雅、六
曰頌。若夫春鶯之囀花中、秋蟬之吟樹上、雖無曲折、

各發歌謠。物皆有之，自然之理也。然而神代七代，時質人淳，情欲無分，和歌未作。逮于素盞鳥尊，到出雲國，始有卅一字之詠。今之反歌之作也。其後，雖天神之孫，海童之女，專莫不以和歌通者也。爰及人代，此風大興。長歌、短歌、旋頭、混本之類，雜體非一，源流漸繁。譬猶拂雲之樹，生自寸苗之煙，浮天之波，起於一滴之露。至如難波津之什，獻天皇，富緒河之篇，報太子，或事關神異，或與人幽玄。但見上古之歌，多存古質之語，未爲耳目之玩，徒爲教戒之端。古天子，每良辰美景，詔侍臣預宴筵者，獻和歌，君臣之情，由斯可見。賢愚

之性，於是相分。以所隨民之欲，擇士之才也。自大津皇子之初作詩賦，詞人才子，慕風繼塵，移彼漢家之字，爲我日域之俗。民業一改，和歌漸衰。然猶有先師柿下大夫者，高振神妙之思，獨步古今之間。有山邊赤人者，並和歌之仙也。其餘業和謠者，綿綿不絕。及彼時變澆漓，人貴奢淫，浮詞雲興，艷流泉涌，其實皆落，其花獨榮。至有好色之家，以此爲花鳥之使，乞食之客，以之爲活計之媒。故半爲婦人之右，難進丈夫之前。近代存古風者，纔二三而已。然長短不同，論以可辨。花山僧正，尤得歌體。然其詞，甚花而少實。如畫圖好女，徒動人

情在原中將之歌，其情有餘，其詞不足。如萎花，雖少彩色，而有薰香。文琳巧詠物。然其體近俗也。如賈人之著鮮衣。宇治山僧喜撰，其詞華麗，而首尾停滯。如望秋月遇曉雲。小野小町之歌，古衣通姬之流也。然艷而無氣力。如病婦之著花粉。大友黑主歌，古猿丸大夫之次也。頗有逸興，而其體鄙。如田夫之息花前也。此外，氏姓流聞者，不可勝數。其大抵皆以艷爲基，不知歌之趣者也。俗人爭事榮利，不用和歌。悲哉。雖貴兼相將，富餘金錢，而骨未腐於土中，名先滅於世上。適爲後輩被知，唯和歌之人而已。何者，語近人耳，義通神

明也。昔平城天子，詔侍臣，令撰萬葉集。自爾以來，時歷十代，數過百年。其間，和歌弃不被採。雖風流如野相公，雅情如在納言，而皆依它才聞。不以斯道顯。伏惟陛下御宇，于今九載。仁流秋津洲之外，惠茂筑波山之陰。淵變爲瀨之聲，寂寂閉口，沙長爲岩之頌，洋洋滿耳。思繼既絕之風，欲興久廢之道。爰詔大內記記友則，御書所領記貫之，前甲斐少日凡河內躬恒，右衛門府生壬生忠岑等，各獻家集，並古來舊歌。於是重有詔部類所奉之誦，勒爲廿卷。名曰古今和歌集。臣等詞少春花之艷，名竊秋夜之長。況手進恐時俗之嘲，退慙

才藝之拙。適遇和歌之中興、以樂吾道之再昌。嗟呼、人丸既没、和歌不在斯哉。于時延喜五年歲次乙丑四月十五日、臣貫之等謹序。

伊勢物語

(在原業平)

昔男ありけり。その男、身をえうなきものに思ひなして、京には居らじ、東の方へすむべき所もとめにとて往きけり。信濃の國淺間の岳に烟のたつを見て、

信濃なる淺間のたけにたつけふり

をちかた人の見やはとがめぬ。

もとより友とする人、一人二人して諸共にいきけり。道知れる人もなくて惑ひ行きけり。三河の國八橋といふ所にいたりぬ。そこを八橋といふことは、水の蜘蛛手に流れ別れて、木入つわたせるによりてなん、八橋とはいへる。その澤の邊の木蔭にあり居て、餉くひけり。その澤に燕子花かきつばたいとおもしろく咲きたり。それを見てある人のいはく、かきつばたといふ五文字を句の上にするて、旅のこゝろをよめといひければ、よめる、

唐衣きつゝなれにしつましあれば

はるく來ぬる旅をしぞおもふ

とよめりければ、みな人餉の上になみだ落してほとびにけり。ゆきくして駿河の國にいたりぬ。宇津の山にいたりて、我いらんとする道はいとくらうほそきに、蔦葛はしげりて物心ほそくすじろなるめ

と見ることと思ふに、修行者あひたり。かゝる道にはいかでかちはずるといふに、見れば見し人なりけり。京にその人のもとにとて、文書きてつく、

駿河なるうつ山の山邊のうつゝにも

夢にも人のあはぬなりけり

富士の山を見れば、五月のつごもりに雲いと白うふれり。

時しらぬ山はふじの嶺いつとてか

かのこまだらに雪のふるらん

その山はこゝにたとへば、比叡の山を二十ばかり重ねあげたらんほどして、形は鹽尻しほじりのやうになんありける。なほゆきくして、武藏の國と下總の國との中に、いと大なる川あり、それを隅田川といふ。その川の邊に群れ居て思ひやれば、かぎりなく遠くも來にけるかな

とわびあへるに、渡守はや船に乗れ、日もくれなんといふに、乗れて渡らんとするに、皆人もわびしくて、京に思ふ人なきにしもあらず。さるをりしも、白き鳥の啄はくと足と赤き鴨しぎの大きなる、水の上に遊びつゝ魚いそを食ふ。京には見えぬ鳥なれば、皆人見しらず。渡守に問ひければ、これなん都鳥といふを聞きて、

名にしおはゞいざこととはんみやこ鳥

我ちもふ人はありやなしや

とよめりければ、船こぞりてなきにけり。

風ふけば沖つ白浪たつ田山

よはにや君がひとり越ゆらん

世の中にたえて櫻のなかりせば

はるの心はのどけからまし

ちればこそいと櫻はめでたけれ

うき世になにか久しかるへき

あかなくにまだきも月のかくるゝか

山のはにげて入れずもあらなむ

忘れては夢かと思ふ思ひきや

雪ふみわけて君をみんとは

老いぬればさらぬ別れのありと云へば

いよく見まくほしき君かな

世の中にさらぬ別れのなくもがな

千代もと祈る人の子のため

ちはやぶる神代もきかず立田川

からくれなぬに水くゝるとは

つひにゆく道とは兼てきゝしかと

昨日けふとは思はさりしを

土佐日記

(紀 貫 之)

男もすと云ふ日記といふものを、女もしてみむとてするなり。それの年、十二月しほすの二十日あまり一日の、戌の時に門出す。そのよしいささか物にかきつく。

ある人、縣あかたの四年五年はてし、例の事ども皆爲終へて、解由けゆなど取りて、住む館たちより出てし、船にのるべき所へわたる。これかれ、知る知らぬ、送りす。年頃よく具しつる人々なん、別れがたく思ひて、其日頻にとかくしつゝのゝしる内に夜更けぬ。

廿二日、和泉の國までたひらかにと願ひたつ。藤原の言實、船路なれど馬の餞す。上中下かみなかしも酔ひすぎて、いと怪しく、潮海の邊にてあされあへり。

廿四日、講師、馬の餞しに出でませり。ありとある上下、童まで

酔ひしれて、一文字をだに知らぬものしが、足は十文字に踏みてぞ遊ぶ。

都いでし君に逢はむと來しものを

こし甲斐もなく別れぬるかな

白砂の浪路を遠くゆき交ひて

われに似べきは誰ならなくに

都へと思ふも物の悲しきは

かへらぬ人のあればなりけり

枕草子

(清少納言)

春は曙、やうく白くなりゆく。山際すこしあかりて、紫だちたる雲の細くたなびきたる。夏は夜、月のころはさらなり、闇もなほ

螢飛びちがひたる、雨などの降るさへをかし。秋は夕暮、夕日はなやかにさして、山際いと近くなりたるに、鳥のねどころへゆくとして、三つ四つ二つなど飛びゆくさへあはれなり。まいて雁などのつらねたるが、いとちいさく見ゆる、いとをかし。日入りはてし、風のおと蟲のねなど、いとあはれなり。冬は雪の降りたるは、いふべきにもあらず。霜などのいと白く、又さらでもいと寒き、火など急ぎおこして、炭もてわたるも、いとつきよくし。晝になりて、ぬるくゆるびもてゆけば、炭櫃火桶の火も、白き灰がちになりぬるはわろし。

方丈記 其一

(鴨長明)

行く川の流は絶えずして、しかも本の水にあらず。よどみに浮ぶ

うたかたは、かつ消えかつ結びて、久しくとゞまることなし。世の中にある人と、住家と、またかくの如し。玉敷の都の中に、棟を並べ、薨を争へる、尊き卑しき人の住居は、代々を経て盡せぬものなれど、これをまことかと尋ねれば、昔ありし家は稀なり。或は去年破れて今年は造り、あるは大家滅びて小家となる。住む人もこれに同じ。處もかはらず、人もおほかれど、いにしへ見し人は、二三十人が中に、僅に一人二人なり。朝に死し、夕に生るゝならひ、唯水の泡にぞ似たりける。知らず、生れ死ぬる人、何方より來りて、何かたへか去る。又知らず、假の宿、誰が爲に心を惱し、何によりてか目を悦ばしむる。この主人と住家と、無常を争ひ去るさま、いはゞ朝顔の露に異ならず。或は露おちて、花のこれり。残るといへども、朝日に枯れぬ。或は花は萎みて、露なほ消えず。消えずといへども、

ゆふべを待つことなし。

方丈記 其二

南にかけひあり。岩をたゝみて、氷をためたり。林の、軒ちかければ、つまぎを拾ふに乏しからず。名を、外山といふ。正木のかづら、跡をうづめたり。谷しげけれど、西は、晴れたり。觀念のたよりなきにしもあらず。春は、藤浪を見る。紫雲のごとくして、西方にほふ。夏は、ほととぎすを聞く。かたらふごとに、死出の山路をちぎる。秋は、ひぐらしの聲、耳に満てり、空蟬の世をかなしふと聞ゆ。冬は、雪をあはれぶ。つもりさゆるさま、罪障にたとへつべし。もし、念佛、ものうく、讀經、まめならざる時は、みづから

休み、みづから怠るに、妨ぐる人もなく、また、耻づべき友もなし。ことさらに、無言をせざれども、ひとり居れば、口業ををさめつべし。かならず、禁戒を守るとしもなければ、境界なければ、何につけてかやぶらむ。もし、跡の白浪に、身をよするあしたには、岡のやに行きかふ船をながめて、満沙彌が風情をぬすみ、もし、桂の風、葉をならす夕には、潯陽の江をおもひやりて、源都督のながれをならふ。もし、あまりの興あれば、しばしば、松のひびきに、秋風の樂をたぐへ、水の音に、流泉の曲をあやつる。藝は、これ、つたなけれど、人の耳をよろこばしめむにもあらず。ひとりしらべ、ひとり詠じて、みづから、心をやしなふばかりなり。

また、ふもとに、一の柴の庵あり。すなはち、この山守が居るところなり。かしこに、小童あり。時々來りて、あひ訪ふ。もし、つ

れづれなるときは、これを友となして、あそびありく。かれは、十六歳、われは、六十。その齡、ことの外なれど、心をなぐさむることとは、これ、おなじ。あるひは、つばなをぬき、岩なしをとる。又、ぬかごをもち、芹をつむ。あるひは、すそわの田井にありて、落穂を拾ひて、ほぐみを作る。もし、日うららかなれば、嶺によぢのぼりて、はるかに、故郷の空を望み、木幡山、伏見の里、鳥羽、羽束師を見る。勝地は、主なければ、心をなぐさむるにさはりなし。あゆみ、わづらひなく、志、遠くいたる時は、これより嶺つゞき、すみ山を越え、笠取をすぎて、あるひは、岩間にまうで、あるひは、石山を拜む。もしは、又、粟津の原を分けて、蟬丸翁が跡をとぶらひ、田上川を渡りて猿丸大夫の墓をたづね、かへるさには、をりにつけつゝ、櫻を狩り、紅葉をもとめ、蕨を折り、木の實を拾ひて、

かつは、佛にたてまつり、かつは、家づとにす。もし、夜、しづかなれば、窓の月に、古人をしのみ、猿の聲に、袖をうるほす。草叢の螢は、遠く、眞木の島のかぶり火にまがひ、曉の雨は、おのづから、木の葉吹く嵐に似たり。山鳥の、ほろほろと鳴くをきゝても、父か母かとうたがひ、峰のかせぎの、近くなれたるにつけても、世に遠ざかるほどを知る。あるひは、埋火をかきおこして、老のねざめの友とす。おそろしき山ならねど、ふくろふの聲をあはれぶにつけても、山中の景色、折につけて、つくることなし。いはむや、深く思ひ、深く知れらむ人のためには、これにしも、かぎるべからず。

十六夜日記

(阿 佛 尼)

むかし、壁の中より、もとめでたりけむ、ふみの名をば、今の世の子は、夢ばかりも、身の上のことは、しらざりけりな。みづぐきの岡のくず葉かへすがへすも、かきおくあと、たしかなれども、かひなきものは、親のいさめなりけり。また、賢王の、人をすてたまはぬまつりごとにも漏れ、忠臣の、世をおもふなさけにもすてらるゝものは、かすならぬ身ひとつなりけりと、おもひしりながら、また、さてしもあらで、なほ、このうれへこそ、やるかたなく、悲しけれ。

さらに、思ひつづければ、やまと歌の道は、たゞ、まことすくなく、あだなるすさびばかりと、おもふ人もやあらむ。日の本の國に、天の岩戸ひらけし時、よもの神たちの、神樂のことばをはじめて、世を治め、物をやはらぐるなかだちとなりにけるとぞ、この道のひ

じりたちは、しるしおかれたりける。さても、また、集をえらぶ人は、ためしおほかれど、二たび、勅をうけて、代々にきこえあげたる家は、たぐひ、なほ、ありがたくやありけむ。そのあとにしも、たづさはりて、三たりのをのこども、も、ちの歌ふる反古どもを、いかなるえにか、ありけむ、あづかりもたることあれど、「道をたすけ、子をはぐくめ、後の世をとへ」とて、ふかきちぎりを、むすびおかれし、細川のながれも、ゆゑなく、せきとどめられしかば、跡とふ法のともし火も、道をまもり、家をたすけむ、親子のいのちも、もろともに、きえをあらそふ年月を経て、あやふく、心ほそきものから、何として、つれなく、今日まではながらふらむ。をしからぬ身ひとつは、やすく、思ひすつれとも、子を思ふ心のやみは、なほ、忍ひがたく、道をかへりみるうらみは、やらむかたなく、さても、

なほ、あづまの龜の鏡にうつさば、くもらぬ影もやあらはるゝと、せめて、思ひあまりて、よろづのはじかりを忘れ、身をえうなき物になしはて、ゆくりもなく、いざよふ月に、さそはれいでなむとぞ、思ひなりぬる。さりとて、文屋の康秀が、さそふ水にもあらず。住むべき國もとむるにもあらず。

ころは、みふゆたつはじめの、さだめなき空なれば、ふりみ、ふらずみ、時雨もたえず、嵐にきほふ木の葉さへ、涙と共に、みだれちりつゝ、事にふれて、心ほそく悲しけれど、人やりならぬ道なれば、いさうしとても、とどまるべきにもあらで、なにとなく、いそぎ立ちぬ。めがれせざりつるほどだに、荒れまさりつる庭もまがきも、ましてと、見まはされて、したはしげなる人々の袖の雫も、なぐさめかねたる中にも、侍従、大夫などの、あなかちに、うち屈し

たるさま、いと、こころぐるしければ、さまたま、いひこしらへ、
閨のうちを見れば、昔の枕さへ、さながら、かはらぬを見るにも、
今さら、かなしくて、かたはらにかきつく。

とどめおく、ふるき枕の、塵をだに、
われたちさらば、誰かはらはむ。

徒然草 其一

(兼好法師)

つれづれなるまゝに、日ぐらし机に向ひて、心にうつりゆくよし
なしごとを、そこはかとなく書きつくれば、あやしうこそものぐる
ほしけれ。

同 其二

あだし野の露消ゆるときなく、鳥部山の烟立ちさらでのみ住みは
つるならひならば、いかにものゝあはれもなからん。世は定めなき
こそいみじけれ。命あるものを見るに、人ばかり久しきはなし。蜻
蛉の夕をまち、夏の蟬の春秋を知らぬとあるぞかし。

同 其三

花は盛り、月は隈なきをのみ見るものかは。雨に對ひて月を戀
ひ、垂れこめて春のゆくへを知らぬも、猶あはれに、なさけ深し。

たれこめて春のゆくへを知らぬ間に
待ちし櫻はうつるひにけり
古 今 集

同 其四

飛鳥川の淵瀬常ならぬ世にしあれば、時移り事去り、たのしびかなしび、ゆきかひて、はなやかなりしあたりも、人住まぬ野らとなり、かはらぬすみかは、人あらたまりぬ。桃李物いはねば、誰ともにか昔を語らむ。まして見ぬいにしへのやむごとなかりけむ、跡のみぞいとほかなき。

同 其五

をりふしのうつり變るこそ物毎にあはれなれ。「物のあはれは秋こそ勝れ」と人毎にいふめれど、それもさるものにて、今一きは心も浮き立つものは春のけしきにこそあめれ。鳥の聲なども殊の外に春

めきて、のどやかなる日影に垣根の草萌え出づる頃より、やや春ふかく霞みわたりて、花もやうやうけしきだつ程こそあれ、折しも風雨うち續きて、心あわただしく散りすぎぬ。青葉になり行くまでよろづにただ心のみぞ悩ます。花橘は名にこそ負へれ、なほ梅の匂にぞいにしへの事も立ち返り戀しう思ひ出でらるる。山吹の清げに藤のおぼつかなきさましたる、すべて思ひ捨てがたき事おほし。

「灌佛のころ、祭の頃、若葉の梢涼しげに茂り行くほどこそ世のあはれも人の戀しさもまされ」と、人の仰せられしこそげにさるものなれ。さ月あやめ暮くころ、早苗とる頃、水鶏のたたくなど心ぼそかぬかは。みな月の頃あやしき家に夕顔のしろく見えて、蚊遣火ふすぶるもあはれなり。六月祓またをかし。

棚機祭ることなまめかしけれ。やうやう夜寒になるほど、雁鳴き

てくる頃、萩の下葉色づくほど、わさ田苧り乾すなど取りあつめたる事は秋のみぞ多かる。又野分のあしたこそをかしけれ。いひつづくればみな源氏物語、枕草子などに事舊りにたれど、おなじ事又いま更にいはいにもあらず。おぼしき事はぬは腹ふくるる業なれば、筆に任せつつあぢきなきすさびにて、かいやり捨つべき物なれば、人の見るべきにもあらず。

さて冬枯のけしきこそ秋にはをさを劣るまじけれ。汀の草に紅葉の散りとどまりて霜いと白う置けるあした、遣水より烟の立つこそをかしけれ。年の暮れはてて人毎にいそぎあへる頃ぞ又なくあはれなる。すさまじき物にして見る人もなき月の、寒けくすめる二十日あまりの空こそ心ぼそき物なれ。御佛名、荷前の使立つなどぞあはれにやむごとなき。公事もしげく、春のいそぎに取りかさねて、

催し行はるるさまぞいみじきや。追儼より四方拜につづくこそ面白けれ。つごもりの夜いたう暗きに、松どもともして夜半過ぐるまで人の門叩きはしりありきて、何事にかあらむ、ことごとしくののしりて、足を空に惑ふが、曉方よりさすがに音なくなりぬるこそ年のなごりも心細けれ。亡き人のくる夜とて魂祭るわざは、このごろ都にはなきを、あづまの方には猶する事にてありしこそ哀なりしか。かくて明けゆく空のけしき、昨日にかはりたりとは見えねど、引きかへ珍しきこちぞする。大路のさま松立てわたして、花やかに嬉しげなるこそ又あはれなれ。

重盛の諫言 (源平盛衰記)

内府ややしばらくありて、直衣の袖より疊紙を取り出し、落つる涙をちし拭ひて申されけるは「左右の仔細はしばらくおき、此の御貌を見まゐらすこそ、現とも存じ候はね。さすが我が朝は邊鄙粟散の境と申しながら、天照大神の御子孫國の主として、天兒屋根命の御末、朝政を掌り給ひしより以來、太政大臣の官に昇れる人、甲冑を著する事輒かるべしとも覺えず。就中出家の御身なり。夫れ三世の諸佛の、解脱幢相の法衣を脱ぎ捨てて、忽に弓箭を帶しおはしまさむ事、内には既に破戒無慙の罪を招き給ひ、外には又仁義禮智信の法にも背きおはしますらむと覺ゆ。かたがた、恐れある申しごとにて候へども、しばらく御心をしづめおはしまして、重盛が申し状を具に聞し召さるべきやらむ。且は最後の申状と存ずれば、心底

に旨趣を残すべからず。

先、世に四恩と云ふ事あり。諸經の説相同じからず。内外の存知各別なりといへども、しばらく心地觀經を見候ふに、一には天地の恩、二には國王の恩、三には父母の恩、四には衆生の恩是れなり。是れを知るを以つて人倫とし、知らざるを以つて鬼畜とす。其の中に、尤重きは朝恩なり。『普天之下莫非王土、率土之濱莫非王臣。』されば彼の潁川の水に耳を洗ひ、首陽の山に蕨を折りける賢臣も、勅命の背き難き禮義をば存ずとこそ承れ。いかに况や、つらつら上古を思ふに、御先祖平將軍貞盛は、相馬小次郎將門を誅せられたりけるも、勸賞行はれし事受領には過ぎざりき。伊豫入道頼義が、貞任、宗任を滅したりけるも、いつか丞相の官に昇り不次の朝恩に預りし。就中此の一門は、辱くも桓武天皇の御苗裔、葛原親王の後胤とは申

しながら、中頃よりは無下に官途もち下つて、下國の受領をだにも許されずこそありけるに、刑部卿殿備前守の御時、鳥羽院の御願、得長壽院造進の勸賞に因りて、家に久しく絶えたりし内の昇殿を許されける時は、萬人唇を反し侍りけるこそ傳へ承り候へ。されども御身は、既に先祖にもいまだ拜任の例を聞かざりし太政大臣を極めさせおはします上、又大臣の大將に至れり。所謂重盛など暗愚無才の身を以つて、蓮府槐門の位に至る。しかのみならず、國郡半は一門の所領となり、田園ことごとく一家の進止たり。是れ希代の朝恩に候はずや。今此れ等の莫大の御恩を忘れて、濫りがはしく君を傾け奉らむと思召し立つこと、天照大神、正八幡宮の神慮にも、定めて背き給ふべし。朝恩に背く者は、近くは百日遠くは三年を過ぎずとこそ申し傳へて侍れ。昨日までは人の上にこそ承りつるに、今

日は我身に懸りなむとす。

其の上日本は是れ神國なり。神は非禮を受け給はず。然るに君の思召し立つ所道理尤至極せり。この一門代代朝敵を平げて、四海の逆浪を鎮むる事は、無雙の勳功に似たれども、面面の恩賞に於いては傍若無人と申すべし。聖徳太子の十七箇條憲法には『人皆有之、心各有執。彼是則我非、我是則彼非。我心非聖、彼必非愚、共是凡夫耳。是非之理、能可定、相共賢愚、如環無端。是以彼人雖瞋、還恐我失』とこそ承れ。是れに依つて、君事のついでを以つて、奇怪なりと思召すは尤御理にてこそ候へ。然るに御運の盡きざるによりて、此の事既に顯れぬ。仰せ含めらるゝ大納言又召し置かれぬる上は、たとひ君如何なる事思召し立つとも、何の恐れかおはすべき。大納言已下の輩に所當の罪科行はれ候はむ上は、退いて事の由を陳じ申

させ給ひて、君の御爲には愈奉心の忠勤を盡し、人の爲には益撫育の哀憐を致させ給はゞ、佛陀の加護に預り、神明の冥慮に背く可らず。神明佛陀の感應あらば、君もなか思召し直す御事もなかるべき。濫りがはしく法皇を傾け進らせむとの御計ひ、かたがた然るべからず。重盛に於いては御供仕るべしとも存じ侍らず。『不以父命辭王命、以王命辭父命。不以家事辭王事。以王事辭家事』といふ本文あり。又君と臣とを並べて親疎を分つ事なく、君に付き奉るは忠臣の法なり。道理と僻事とを并べむに、争か道理に附かざらむ。是は專君の御理にておはしまし候へば、神明擁護を垂れ給ふらむ、さらば逆臣忽に滅亡し、凶徒すなほち退散して、八荒風和ぎ四海浪靜まらむ事、掌を反すよりも猶速なるべし。されば重盛院中を守護し進らせ侍らばやとこそ存じ候へ。

重盛はじめ六位に叙せられ、今三公に列るまで、朝恩を蒙る事家に其の例なし。身に於いて過分なり。其の重き事を思へば千顆萬顆の珠にもこえ、其の深き色を論ずれば一入再入の紅にも、定めて過ぎたるらむ。されば院中に参り籠り侍りなむ。其の儀ならば重盛が命に替り身に替らむと契を結べる侍、二百餘人は相從へて、待ちて候ふらむ。此の者共はさりととも重盛をば捨て思はじとこそ存じ候へ。是れを以つて先例を思ふに、一とせ保元の逆亂の時、六條判官爲義は新院の御方に参り、子息下野守義朝は内裏に参りて、父子合戦を致す。新院の御方軍破れて、大炊殿戦場の烟の底になりしかば、院は讃州へ下向、左府は流矢に當りて失せ給ひぬ。大將軍爲義法師をば、子息義朝承りて、朱雀大路に引き出し、首を刎ねたりしをこそ、同じく勅詔の辱さといひながら、惡逆無道の至り、口惜しき事かな

と存じ候ひしか。正しく御覽せられし事ぞかし。其の二人の上の様に淺ましく悲しかりし事の、今日は又重盛が身の上に罷りなりぬる事よと存ずるこそ、心憂く覺え候へ。悲しい哉。君の御爲に奉公の忠を致さむとすれば、迷廬八萬の頂より猶高き父の御恩忽に忘れなむとす。痛ましい哉。不幸の罪を免れむとすれば、又朝恩重疊の底極めがたき君の御爲に不忠の逆臣となりぬべし。『君雖不君、臣不可以不臣、父雖不父、子不可以不子』といへり。彼れといひ此れといひ進退ここに谷れり思ふに無益の次第なり、只末代に生を受けて、かかる憂目を見る重盛が果報の程こそ口惜しけれ。されば申し請くる所御承引なくして、猶御院參あるべくば、只今重盛が首を召さるべく候ふ。所詮院中をも守護仕るべからず、惡逆の咎逃れ難し。又御供をも仕るべからず、忠臣の義忽に背き候ふ。申し請くる詮、只

首を召さるべきにあり。唯今思召し合せおはしますべし。御運は既に末に臨みぬと覺え候ふ。人の運命の盡きなむとする時、斯様の事は思ひ立つ事にて侍り。老子の言こそ思ひしられ候へ。『功名稱遂、不退身避位、則遇於害』と申せり。彼の漢の蕭何は勳功を極むるに依つて官大相國に至り、劍を帶し履を著けながら、殿上に昇る事を許されしかども、叡慮に背く事ありしかば、高祖重く禁めて、廷尉に下して深く罪せられき。斯様の先蹤を思ひ侍るにも、御身富貴といひ榮華といひ、朝恩といひ重職といひ、極めさせおはしましぬれば、御運の盡きむ事も難かるべきにあらず。『富貴之家、祿位重疊、猶再實之木、其根必傷』とも申す。心細くこそ覺え候へ。噫呼『邦無道富貴耻』といふ本文あり。されば重盛いつまでか命生きて、亂れむ世をも見るべき。唯速に首を召され候ふべし。人一人に仰せ付

けられて御坪に引出されて、重盛が首を刎ねられむこと、安き事にこそ候へ。人人是れをばいか聞き給ふか」とて、又直衣の袖をしぼりつつ、泣く泣く諫め申されけり。是れを見給ひける一門の人人も、涙を流し袖を絞らぬはなかりけり。

入道は口説き立てられて、あゝる泣き色にはおはしけれども、猶へらぬ體にて「さらば今は世にもいろひ侍るまじ。院參も思ひ止り候ひぬ。其の上は召し禁むる者共をも、死罪にも流罪にもせてこそあらめ。但入道かく計らひ申す事も、全く身の爲ならず。淨海年たけて餘命幾ばくもなし。唯子子孫孫末の代までも安穩にやと存ずるばかりなり。其の事人望に背き愚案の企にあらは、いか様にも御計らひあるべし」と宣ひて、内へ入られけり。内府は弟の殿原に向ひて、「如何に斯様のひけうは結構せられ候ふぞや。たとひ入道殿こそ老耄

し給ひて、あらぬ振舞ありとも、今は各こそ家門をも治め、悪事も宥め申さるべきに、相副へたる御事ども候ふ哉」と仰せられければ、宗盛已下の人人、苦苦しくそぞろさしてぞ見え給ひける。内府は、中門の廊にたち出て給ひ、無るべき侍共の竝み居たりける所にて仰せけるは「重盛が申しつる事ども、慥に承りつるにや。されば院參の御供は、重盛が首の斬られむを見て後に仕るべしと覺ゆるはいかに。今朝よりここに候ひて、斯様の事ども叶はざらむまでも申さばやと存じつれども、此れ等が體の餘にひた騒ぎに見えつるほどに、歸りつるなり。今は憚る處あるべからず。猶も御院參あるべきならば、一定重盛が首をぞ召されむすらむ。各其の旨をこそ存ぜめ。但さも未、仰せられぬは、いか様になるべきやらむ。さらば人人參れや」とて、又小松殿へぞ歸られける。

薩摩守忠度

(源平盛衰記)

古郷を燒野の原にかへりみて

忠

度

すゑも煙の浪路をぞゆく

はかなしや主は雲井にわかるれば

經

盛

宿は煙と立ちのぼるかな

落ち行く平家の人人、或は式津の浪枕、八重の鹽路に日を経つつ、船に棹さす人もあり。或は遠きを凌ぎ近きを分けつつ、駒に鞭うつ人もあり、前途をいづこと定めず、生涯鬪戦を日に期して、思ひ思ひ心心にぞ下り給ふ。(中略)

中にもやさしき事ときこえしは、薩摩守忠度と申すは、入道の舍

弟なり。淀の川尻まで下りたりけるが、郎等六騎相具して、忍びて都へ歸り上る。如法夜半の事なるに、五條三位俊成卿の宿所に行きて門を叩く。内には是れを聞きけれども、かかる亂れの世なる上、いぶせき夜半の事なれば、敲けども敲けども開けざりけり。餘りに強く敲きければ、やや久しくありて、青侍を出だし、戸をひらかて、是れを問ふ、「忠度と申す者、見參に申し入れたき事ありて參りたり」と答へければ、三位大庭に下り、世に恐れて内へは入れざりけれども、門をば細目に開けて對面あり。

忠度宣ひけるは「かかる身として、御ため憚りあれども、所詮一門榮華盡きて、都に安堵せず、西海へ落ち下り侍り、亡びむ事疑なし。世靜りて後定めて勅選の沙汰候はむか、縦ひ身は八重の鹽路の底に沈むとも、藻鹽草書き置く末の言の葉後の世までも朽ちぬ形見

に傳はり侍れかしと思ひ出でて、河尻より忍び上りて侍り。是れぞ年比讀み集めたりし愚詠どもにて侍る。身と共に波の下にみくづとなさむ事、遺恨にはべり。是れを砌下に進らせ置き候ふ。勅選の時は、必おぼし召し出でよ」とて、卷物一卷、泣く泣く鎧の引合せより取り出でたり。

三位感涙を流し、是れを受取り、「御詠一卷預り置き候ひ畢んぬ。これ永代秀逸の御形見、未來歌仙の指南の爲か。此の忿劇の中に御音信に預る事恐悦少からず候ふかな。縦ひ浮生を萬里の波に隔つとも、御形見をば一戸の窓に納めて、勅選の時は思ひ出だし侍るべし」と宣へば忠度、「今は身を波の底に沈め、骨を山野に曝すとも、思ふ事なし」とて、馬にのり、古詩を

前途程遠馳思於鴈山之暮雲

後會期無霑纓於鴻臚之曉淚。

と、うち上げうち上げ詠じつつ、南を指してぞ落ち行きける。本文には「後會期遙」と書きたるを、忠度還り見るべき旅ならず、今を限りの別れなりと思ひければ、「後會期無」と詠じけるこそ哀れなれ。三位もなごりの惜しくして、遙に是れを見送りても、あはれ世に在りしには此の人どもにこそ、詔ひ追從せしに、替る習とて、今は門を隔つる事の悲しさよと、哀れなるにも涙優なるにも涙、忍びの袖をぞ紋られける。世静りて後、千載集を撰まれけるに、忠度の、此の道を嗜み、河尻より上りたりし志を思ひ出で給ひて「故郷の花」と云ふ題にて「讀み人しらず」とて、一首入れられたり。

さざ浪や志賀の都は荒れにしを

昔ながらの山櫻かな

とよめる歌なり。名字をも顯し、あまたも入れまほしかりけれども、朝敵となれる人の態なれば、憚り給ひて、只一首ぞ入れられける。亡魂いかに嬉しく思ひけむ、哀れにやさしくぞ聞えし。

行きくれて木の下かけを宿とせば

花やこよひのあるじならまし

忠 度

那須與一扇の的

(源平盛衰記)

沖より、飾りたる船一艘、渚に向つて漕ぎ寄す。二月二十日のことなるに、柳の五重に、紅の袴着て、袖笠かつげる女房あり。皆紅の扇に、日をいだしたるを、杭に挿みて、船の舳頭に立て、これを射よとて、源氏の方をぞ招きたる。この女房といふは、建禮門院

の後立の御時、千人の中より撰びいだせる雑司に、玉蟲の前とも、舞の前とも申し、今年十九にぞなりける。雲の髪、霞の眉、花のかほばせ、雪の膚、繪にかくとも、筆も及びがたし。折節、夕日に耀きて、いとゞ、色こそ増りけれ。(中略)

源氏は、遙に、これを見て、當座の景色の面白さに、目をおどろかし、心をまよはす者もあり。この扇、誰にか射よと、仰せられむと、肝膾を作り、かたづを嚙める者もあり。判官、畠山を召す。重忠は、木蘭地の直垂に、裾細目の鎧着て、大中黒の矢負ひ、所藤の弓の真中取り、黒の馬の、太く逞しきに、金覆輪の鞍あき、判官の弓手の脇に進み出で、畏つて候ふ。義経は女にめづる者と平家にいふなるか。かく構へたらば、定めて進み出で、興に入らむところをよき射手を用意して、真中さし當て、射落さむの、たばかり事と心

得たり、あの扇射られなむや」と宣へば、畠山、畏つて、「君の仰、家の面目と存ずる上は、仔細を申すに及ばず。但し、これは、ゆゑしき晴の藝なり。重忠、打物取つては、鬼神といふとも、更に、辭退申すまじ。地體、脚氣の者なる上に。この間、馬にふられて、氣分をさし、手あばらに覺え侍り。射損じては、私の耻は、さる事に、源氏一族の御瑕瑾と存ず。他人に仰せよ」と、申す。畠山、かく、辭しける間、諸人、色を失へり。判官は「さて、誰かあるべき」と、尋ね給へば、畠山、「當時、味方には、下野國の住人、那須太郎助宗が子に、十郎兄弟こそ、かやうの小物は、さがしく仕り候へ。彼等を召さるべし。人は、ゆるし候はずとも、強弓、遠矢、打物などの時は、仰を蒙るべし」と、深く、申し切つたり。「さらば、十郎」とて召されたり。かちんの直垂に、洗革の鎧に、片白の冑、二十四

指したる白羽の矢に、笛籐の弓の、塗り籠めたる真中取つて、渚を下りにさしくつろげてぞまゐりたる。判官、「あの扇仕れ」と、仰す。御説の上は、仔細を申すに及ばねども、一谷の岩石を落ちし時、馬弱くして、弓手の臂を、沙につかせて侍りしが、灸治も、いまだ、癒えず、小振こぶるひして、定の矢仕りぬとも存ぜず。弟與一冠者は、小兵にて侍れども、かけ鳥、的など、はづるゝは、稀なり。定の矢仕るべしと存ず。仰せ下さるべし」と、弟に譲りて、扣へたり。「さらば、與一」と、召されたり。

與一、その日の装束は、紺村濃の直垂に、緋威の鎧、鷹角反冑を、猪頸に着なし、二十四指したる中黒の矢負ひ、滋籐の弓に、赤銅造の太刀をはき、宿赫白馬さびつぎのふとくたくましきに、洲崎に、千鳥の飛び散りたる具鞍ぐいざんあきて、乗つたりけるが、進み出でて、判官の前に、

弓取りなほして、畏れり。「あの扇仕れ。晴の所作ぞ。不覺すな」と、宣ふ。與一、仰承り、仔細申さむとする所に、伊勢三郎義盛、後藤兵衛尉實基等、與一を、判官の前にひき据えて、「面々の故障に、日、既に、暮れなむとす。兄の十郎指し申す上は、仔細やあるべき。とくとき、急ぎ給へ。海上、暗くなりなば、ゆゆしき御方の大事なり。はやはや」と、いひければ、與一、まことにと思ひ、冑をばぬぎ、童に持たせ、揉烏帽子ひき立てし、薄紅梅の鉢巻して、手綱かいくり、扇の方へどうち向ひける。生年十七歳、色白く、小髭生ひ、弓の取りやう、馬の乗りかた、優なる男にぞ見えたりける。

波うち際に、うち寄せて、弓手の沖を見渡せば主上をはじめ奉り、國母建禮門院、北政所、方々の女房達の御船共、その數、漕ぎ並べ、屋形屋形の前後には、御簾も、几帳も、さしめさけり。袴はかま温卷あひまきの座

までも、楊梅桃李と飾られたり。鹽風に誘はるゝ虚そら燒なきは、吾妻の袖にぞ通ふらし。妻子の沖を見渡せば、平家の軍將、屋島大臣をはじめ奉り、子息右衛門督清宗、平中納言教盛、新中納言知盛、修理大夫經盛、新三位中將資盛、左中將清經、新少將有盛、能登守教經、侍從忠房、侍には、越中次郎兵衛盛嗣、悪七兵衛景清、江比田五郎民部大輔等、みな、甲冑を帶して、數百艘の兵船を漕ぎ並べて、これを見る。水手楫取に至るまで、今日をはれとぞふるまひたる。うしろの陸を顧みれば、源氏の大將軍大夫判官をはじめ、畠山庄司次郎重忠、土肥次郎實平、平山武者所季重、佐原介能澄、子息平六能村、同十郎能連、和田小太郎義盛、同三郎宗實、太田和四郎能範、佐々木四郎高綱、平左近太郎爲重、伊勢三郎義盛、横山太郎時兼、城太郎家永等、源氏大勢にて、轡あたりを並べて、これを見る。定の當を

知らざれば、源氏の兵、各、手をぞ握りける。されば、沖も、渚も
おしなべて、いづれも、晴とちもひけり。
そこしも、遠淺なり。鞍爪、鎧の菱縫板の浸るまで、うち入りた
れども、沛艾の馬なれば、海の中にて、はやりけり。手綱をゆりす
ゑ、ゆりすゑ、鎮むれども、寄する小波に、物怖して、足も止めず、
狂ひけり。扇の方をきつと見れば、折節、西風吹き來て、船は、艫
舳も動きつゝ、扇、杭にもたまらねば、くるりくるりと廻りけり、
いづれの所を射るべしともおぼへず。興一、運のきはめと悲しくて、
眼をふさぎ、心をしづめて、「歸命頂禮八幡大菩薩、日本國中大小神
祇、別しては、下野國日光宇都宮氏御神那須大明神、弓矢の冥加あ
るべくば、扇を座席に定めて給へ。源氏の運も、きはまり、家の果
報も、つくべくば、矢を放たぬ前に、ふかく、海中に沈め給へ」と、

祈念して、目を開きて、見たりければ、扇は、座にぞ靜れる。

さすがに、物の射にくきは、夏山の茂き緑の木の間より、僅に見
ゆる小鳥を、殺さずして射ること大事なれ。挟みて立てたる扇なり。
神力、既に、指し副ひたれば、手の下なりと思ひつゝ、十二束二伏
の鏑矢を抜きいだし、爪やりつゝ、滋藤の弓、握太なるに、うちく
はせ、よつ引き、しばし、固めたり。源氏の方より、「今少し、うち
入り給へや」と、いふ。七段ばかりを隔てたり。扇の紙には、日を
いだしたれば、恐あり。からめのほどをと、心ざして、ひやうと放
つ。浦響くまで鳴り渡り、蚊目より、一寸おきて、ふつと射きりけ
れば、かなめは、船に留りて、扇は、空に上りつゝ、しばし、宙に
ひらめきて、海へ、颯とぞ入りにける。

折節、夕日に輝きて、波に漂ふ有様は、龍田の山の秋の暮、河瀬

の紅葉に似たりけり。鳴矢は抜けて、潮にあり。濤の浮洲と覺えたり。平家は舷をたゝきて、女房も、男房も、あ射たり射たりと、感じたり。源氏は、鞍の前輪、箆をたゝきて、射たり射たりと譽めにけり。

宇治河の先陣

(源平盛衰記)

明日の辰の始に、近江國住人佐々木四郎高綱、佐殿の館に早參して、所存ある體と覺えたり。兵衛佐、宣ひけるは、「いかに、御邊は、この間は、近江に在國と聞けば、志あらば、軍兵上洛に附きて、京へぞ上り給はんすらむと、相存ずるに、いつ下向ぞ」と、問ひ給ふ。高綱、申しけるは、その事に侍り。去年十月の頃より、江州佐々木莊に居住のところ、かゝる騒動を承れば、誠に、近きにつきて、

京へこそ打ち上るべきに、軍の習、命を君に奉りて、戰場に出づる事なれば、再び、歸參すべしと存ずべきにあらず。今一度、見參にも入り、御暇をも申さむため、また、いづくの討手にむかへとも、たしかの仰をも蒙らむ料に、正月五日の卯刻に、佐々木の館を打ち出て、三箇日の程に、鎌倉に下着し侍りき。且は、下向せずして、自由の京のぼりも、その恐ありと存じ、旁の所存によりて、罷り下れり。志は、斯様に運びたれども、一匹持ち侍りたる馬は、馳せ損じぬ。親しき者といふ、智音と申す人々、面々に打ち立つの間、誰に馬一匹をも尋ね乞ふべしとも、覺えねば、いかが仕り侍るべきと、心勞して、大名小名、既に上りぬれども、今までは、かくて候ふなり」と、申す。兵衛佐殿は、聞きあへず、「下向、今に始めざる志、神妙々々。抑も、木曾、朝威を輕じ奉るによりて、追討のために、

軍兵を差し上す。宇治、勢多の橋、定めて、引きて侍らむ。宇治川の先陣、渡されなむや」と、ありければ、高綱、申しけるは、「近江の生立の者にて候へば、間近き宇治河、深さ、浅さ、淵瀬迄も、委しく、存知仕つて候ふ。彼の手に向ひ候はゞ、宇治川の先陣は、高綱」と、申す。佐殿は、「去ぬる治承四年八月下旬の頃、石橋の合戦に、大庭三郎に追ひ落され、遁れ難かりしに、殿原兄弟、返り合せて、禦矢射て、頼朝が命を助けられき。その時は、日本半分とこそ思ひしかど、世、未だ、落居せず、さしたる事なし。相構へて、今度、宇治川の先陣勤めて、高名し給へ。必ず、相計ふべきなり。頼朝、随分、秘藏の生陵、御邊に預け奉る」と、直に、仰を蒙る。高綱は、今生の大御恩、希代の面目、家門の勝事、何事かこれに如くべきと、思ひければ、畏り入りて、馬を賜りて、出でむとする

ころに、佐殿、宣ひけるは、「この馬、所望の人、あまたありつる中に、舍弟蒲冠者も申しき。殊に、梶原源太、直參して、眞平に、申しつれども、もしもの事あらば、乗りて出でんずればとて、たばざりき。その旨を存せられよ」と仰せければ、高綱、聊も、そゞろかず、座席になほりて、畏り、「宇治川の先陣、勿論に候ふ。高綱、若し、軍以前に死すと聞召さば、先陣は、はや、人に渡されけりと、思し召さるべし。軍場にて、存命と聞し召さば、宇治河の先陣、高綱渡しけりと、思し召されよ。若し、他人に、先を蒐けられて、本意を遂げずば、敵は、嫌ふまじ、河端にても、河中にても、引き組んで落し、勝負を決すべし」と、申し定めて出でにけり。

佐々木四郎高綱は、生陵に、黄覆輪の鞍置き、白き轡二引兩の手

綱結びて、舍人六人附けて、浮島原を西へ向けてぞ引かせたる。原中宿を過ぎ、平々たる春の野なれば、生唼、斜ならず勇み、身振して、三聲四聲、嘶きたり。鐘をつくが如くなれば、遙に、二里を隔てたる、田子の浦へぞ響きたる。(中略)

源太は、磨墨ほめ愛して居たるところを、舍人ども、生唼引きてぞ通りける、ゆゑしく見えつる磨墨も、勝る生唼に逢ひたれば、無下に、うてゝぞ見えたりける。源太、これを見て、「蒲御曹子の賜はるか、九郎御曹子の賜はるか。よき次とて、院へ進ぜらるゝか」と、思ひて、郎等を以て、「その御馬は、何方へ参り、いかなる人の馬ぞ」と、問はす。舍人「これは、佐々木殿の馬」と、申す。「佐々木殿とは、誰ぞ。三郎殿か。四郎殿か」と、問ふ。「四郎殿の御馬」と、答ふ。源太、「口惜しき事にこそ。景季、再三、所望申しつるに、御免

なき馬を、高綱にたびけることの遺恨さよ。佐々木にたぶ程ならば、先の所望につけて、景季に賜ふべし。景季に賜はぬ程ならば、後の所望なり、高綱に賜ふべからず。大將軍たる人の、源平の大事を前にひかへて、あしくも、偏頗し給へり。これ程の御氣色にては、いかでもありなむ。千世を榮ゆべき世の中にあらず。思へば、電光朝露のごとくなり。いつ死なむも同じきこと、日頃は、佐々木に宿意なし。時に取りて、日の敵なり。高綱、さる剛者なれば、左右なく、よもせられじ。互に、引き組みて、落ち重り、腰の刀にて指し違ひ、耻ある侍二人失ひ、鎌倉殿に、大損とらせ奉らむ。高綱、景季二人は、一人當千の兵をや」と思ひて、相待つところに、佐々木、いかでか、かくとは知るべきなれば、十七騎にて、さしくつるげて、歩ませきたり。源太は、最後と思ひつゝ、磨墨に乗り、太刀を持たず、

刀ばかり指したりけり。遙に、佐々木に目を懸けて、眞横に歩ませ
 塞ぐ。高綱、これを見て、郎等どもに申しけるは、「こゝに控へたる
 は、梶原源太と覺えたり。あの景氣を見るに、馬の立てやう、人を
 待つやう、直事とは覺えず。生暖故に、一定、高綱に組まむと思ふ
 意趣あるらむ。鎌倉殿の意せよとは、この事にこそ。組みて落つる
 ものならば、指し違ひてぞ死なんずらむ。但し、梶原、佐々木、公
 の馬を論じて、命をすてむこと、人目、まこと、面目なし。陳じて
 みむに、かなはずして、梶原、我に組むならば、心あれ」と、さ
 やきて、うち通らむとするところに、源太、打ち並びていひけるは、
 「いかに、佐々木殿、遙に、見參し奉らず。あの御馬は、上より賜
 りてか」と、いひかけて、押し並ぶ。高綱、にこと、うち笑ひて、
 申すやう、實に、久しく見參し奉らず。去年十月の頃より、近江に

侍りつるが、近きにつきて、京へうちのぼるべきに、暇申さでは、
 その恐あり。また、何方へ向へとの仰を蒙らむと存じて、三日に、
 鎌倉へ馳せ下らむと打つ程に、只一匹持ちたりつる馬は、疲れ損じ
 ぬ。さては、乗替なし。いかゞすべきと、思ひ煩ひ、御厩の馬一匹
 申し預らばやと存じて、内々、伺ひさけば、磨墨は、御邊の賜はら
 せ給ひけり。生暖は、御邊も、蒲殿も、再三、御所望ありけれども、
 御許なしと承る。さて、高綱などが賜らむこと、かなひがたし。中
 々申さむも、尾籠なりと存じて、心勞せし程に、由井の濱の勢揃に
 もはづれぬ。さて、又、馬なしとて、留るべきことにもあらず。い
 かゞせむと、按ずる程に、抑も、これは、君の御大事なり。後の御
 勘當は、左右もあれ、盗みて乗らむと思ひて、御厩の小平次に、心
 を入れ、盗みいだして、夜にまぎれ、酒勾の宿まで遣して、この曉、

引かせたり。只今にも、御使走りて、不思議なりといふ御氣色にや預らむと、關心なし。若し、御勘當もあらむ時は、しかるべきやうに、見參に入れ給へ」とぞ、陳じたる。源太、まことゝ心得て、「げに、げに、佐々木殿、たやすくも、盗みいだし給へり。この定ならば、景季も盗むべかりけり。正直にては、よき馬は、儲くまじかりけり」と、狂言して、うち連れてこそ上りけれ。(中略)

* * * * *

御曹子、河の邊近く、高櫓を造らせて、この上に登りて、四方を下知し給ひけり。矢立の硯を取り寄せて、「宇治河先陣と剛者とを、次第を、明々に注して、鎌倉殿へ見參に入るべし」と、仰せられければ、軍兵、各、勇を成して、忠を抽てむとぞ色めさける。御曹子は、櫓の上にて、さまざまの事、下知し給ひけれども、大勢、思ひ思ひ

に、とどめさければ、打ち紛れて、聞えざりければ、平等院の御堂より、大鼓を取り寄せ、櫓の上にて、打ちければ、大勢静りて、何事やらむと、鳴をしづめて、軍將に、目を懸くる時、大音揚げて、下知し給へけるは、「二萬五千餘騎の勢の中に海の邊、川端に栖みて、水練の輩多かるらむ。郎等、家子、舍人、雑色までも、かゝる時こそ、群に抜けたる高名をもすれ。我と思はむ者どもは、物具ぬき置きて、瀬踏して、川の案内を、試みるべし。向の岸を見るに、矢筈を取りたるもの四五百騎と見えたり。瀬踏する者あらば、定めて引き取り、引き取り、射らんずらむ。剛座に附かむと思はむ人々は、馬を捨て、橋桁を渡り、向の岸の軍兵を追ひ拂ひて、水練の輩を、思ふやうに、振舞せよ」と、下知せられければ、これを聞き、平山、馬より飛び下り、橋桁の上に走り登り、弓杖を突き、扇、はらはら

と仕うて、申しけるは、「二萬五千餘騎のその中に、橋桁先陣の渡は、武藏國住人平山武者所季重といふ小冠者なり」とぞ、名乗りける。抑も、當河の有様、深淵潭々として、巨海波に浮べるがごとし。下流森森として、瀧水の漲り落るに臨むに似たり。虹の橋桁危うして、雁齒の構、奇しければ、渡り得むこと、難けれども、軍將の下知を背くは、命を惜むに似たり。身をば、宇治河底に沈むとも、名をば、後代の末にながさむとて、平山、これを渡る處に、佐々木太郎定綱、澁谷右馬允重助、熊谷次郎直實、子息直家、已上五人ぞ、續きて、渡しける。矢ごろも近くなりければ、向の岸の軍兵、弓を強く引かむがために、わざと、兜を脱ぎて、思ひ思ひに引き取り、引き取り、放ちける矢、雨の足の如くに、飛びきたりけれども、甲冑をゆり合せ、ゆり合せ、矢間をたはひて、振舞へば、鎧は、重代の重寶なり、裏

かく矢こそなかりけれ。

熊谷、橋桁を渡らむとて、子息の小次郎を招きて、いひけるは、「汝は、今年十六歳、心は、猛く思ふとも、さねは、未だ、かたまらじ。直實だにも、平に、渡りつかむこと難かるべし。汝は、大勢の川を渡さむ時、總を力にして渡るべし」と、教へければ、小次郎、うち咲ひて、「秋の菓にこそ、核の固る固らぬと申すことは侍れ。十歳以後のもの、實の固らぬことやあるべき。若し、固らざらむにつきても、父をば、いかでか離れ奉るべき。恐らくは、父こそ、常は、風氣とて、目のまふ、膝の振ふとは、仰られ候へ。この大河に向ひて、細桁を渡し給はむこと、危く覺え侍る。目まひ、足振ひ給はむ、直家を憑み給へ。渡し申さむ」と、いひければ、父、これを聞きて、さらばつづけ、小次郎」とて、親子連れてぞ渡りける。誠の瀬には、

子に過ぎたる寶なし。死出の山、三途の河の旅の道も、親子ぞ、互に、助なる。五人の兵、流石、目まひ足ふるひて、水は、逆に流るゝかとぞ覺えける。各、弓をば手に懸けて、這這わたる有様、誠に、餘の命とぞ見えし。熊谷は、我が身の事は、さる事にて、子息の事の心苦しさに、「續くか、小次郎、誤すな。誤すな」と、呼びければ、直家は、「心ゆるし給ひて、落ち入り給ふな。落ち入り給ふな」とぞ、教へける。父子の情の哀さに、熊谷は、これよりして、發心の思は、ありけりとかや。

さるほどに、直實、大音揚げていひけるは、「抑も、この川、固めたる輩は、木曾殿の樹根の郎等には、よもあらず。一旦、附き従ひたる人共にこそあらめ。命は、惜しき習なり。詮なき合戦に與力して、大事の命失ふな。落ちば助けむ」と、いふまゝに引き取り、引

き取り、放つ矢に、木曾殿の郎等に、藤太左衛門尉兼助といふ者、逆に射落されけり。これを始として、水練の者あらば、防矢射むとて、五人進み寄りて、散々に射ければ、多くの郎等、手負ひ、討たれけり。その間に、佐々木が郎等に、常陸國住人鹿島與一とて、無雙の水練あり。鎧脱ぎ置き、禰をかき、腰には、鎌を指し、手には、熊手を持ちて、河の底に入り、やゝ、久しく、沈みくゞりて、亂杭、逆茂木、引き落し、大綱小綱、切り棄てけり。實の器量と見えたりけり。

されども、未だ、川を渡すものはなし。いかゞあるべきと、評定さまざまなりけるに、畠山庄司次郎重忠、進み出で、申しけるは、「事新し。この川は、近江の湖の末、今はじめて出で来る川にあらず。春立つ日影の習にて、細谷川の氷解け、比良の高根の雪消えて、

水のかさは増すとも、水の減ることあるべからず。足利又太郎忠綱も、高倉宮の御謀叛の御時は、渡せばこそ渡しけめ。鎌倉殿の御前にて、さしも、評定のありしは、これぞかし。始めて、驚くべき事にあらず。兼ての馬の用意、その事なり。重忠、渡して見参に入れむ。」と、いふ處に、平等院の小島が崎より、武者二騎、蒐け出でたり。梶原源太と佐々木四郎となり。景季が装束には、木蘭地もくらんちの直垂に、黒革威の鎧に、三枚兜の緒をしめ、滋藤の弓の中を取り、二十四差したる小中黒の矢負ひ、練鐔の太刀を佩きて、鎌倉殿の賜ひたる磨墨といふ名馬に、黒塗の鞍置きて、騎つたり。高綱は、褐かちんの直垂に、小櫻を黄に返したる鎧に、鍬形打ちたる兜に、笛藤弓の眞中取り、二十四差したる石打の征矢、頭高に負ひ、噴物造いかりのづくりの太刀帯いて、これも鎌倉殿より賜ひたる生妾に、黄覆輪の鞍置きてぞ騎つた

りける。誰か先陣と見るところに、源太、さつと打ち入りて、遂に、先立ちけり。高綱、いひけるは、「いかに、源太殿、御邊と高綱と外に人なければ、かく申す。殿の馬の腹帯は、以外に窺ゆぞびて見ゆるものかな。この川は、大事の渡なり。河中にて鞍踏み返して、敵に笑はれ給ふな」と、いひければ、さもあらむと思ひて、馬を留め、鎧踏み張り、立ち上り、弓の弦を口にくはへ、腹帯を解きて、引き詰め、引き詰め、しめける間に、高綱、さつと打ち渡して、二段ばかり、先立ちたり。源太、たばかられけりと、安からず思ひて、これも、打ち浸して渡りけるが、馬の足、綱にかゝりて、思ふ様にも渡されず。高綱は、究竟の逸物に乗りたれば、宇治川、はやしといへども、淵瀬をいはず、さゞめかして、曲に渡し、向の岸近くなりて、高綱が馬、綱に懸りて足をさと歩み除ければ、固より斯する事な

れば、太刀を抜き、大綱小綱三筋、さと切り流し、向の岸へ、打ち上り、鐙、踏み張り、弓枝突いて、「佐々木四郎高綱、宇治河の先陣渡りたりや」と、名乗も果てぬに、梶原源太も流渡に上りにけり。

靜舞曲

(吾妻鏡)

(文治二年)四月八日乙卯、二品御臺所御參鶴丘宮。以次被召出靜女於廻廊。是依可令施舞曲也。此事去比被仰處、申病痾由不參。於身不屑者者、雖不能左右、爲豫州妾、忽出揭焉砌之條、頗恥辱之由、日來内々雖澁申之、彼既天下名仁也。適參向、歸洛在近。不見其藝者、無念由、御臺所頻以令勸申給之間、被召之。

偏可備。大菩薩冥感之旨、被仰云々。近日只有別緒之愁。更無舞曲之業由、臨座猶固辭。然而貴命及再三之間、愁迴白雲之袖、發黃竹之歌。左衛門尉祐經鼓。是生數代勇士之家、雖繼楯戟之基、歷一藹上日之職、自携歌吹曲之故、候此役歟。畠山二郎重忠爲銅拍子。靜先吟出歌云、「よし野山みねのしら雪ふみ分ていりにし人のあとぞこひしき。」次歌別物曲之後、又吟和歌云、「しづやしづとくのをだまきくり返し昔を今になすよしもがな。」誠是社壇之壯觀。梁塵殆可動。上下皆催興感。二品仰云、「於八幡宮寶前、施藝之時、

尤可祝關東万歳之處、不憚所聞食、慕反逆義經、歌別曲。奇恠云々。』御臺所被報申云、『君爲流人、坐豆州給之比、於吾雖有芳契、北條殿怖時宜、潜被引籠之。而猶和順君、迷暗夜、凌深雨、到君之所。亦出石橋戰場給之時、獨殘留伊豆山、不知君存亡、日夜消魂。論其愁者、如今靜之心。忘豫州多年之好、不戀慕者、非貞女之姿。寄形外之風情、謝動中之露膽、尤可謂幽玄。狂可賞翫給云々。』于時休御憤云々。小時、押於御衣卯花重於簾外、被纏頭之云々。

空行之雁

(會我物語)

新玉の年立ちかへり、一萬は九つ、箱王は七つにぞなりにける。ある夕ぐれ、箱王は、母の膝の上にたはぶれながら、「いかに、母御前、父は、いづくにおはしますぞや。その佛は、何國にましますぞや。行きて、をがみ奉らばや。母御前、いざさせ給へ」と、いひければ、はるかに、わすれたるこし方も、今さら、思ひいだされて、さえ入るばかりにおもはれて、母、なくなり、のたまひけるは、「あの會我殿こそ、己等が父にてあれ」と、心づよく、かたられけれども、涙にむせびて、陳じやるかたぞなかりける。箱王、かさねて、申しけるは、「父御前は、まことやらむ、狩場より歸り給ふ道にて、工藤一郎とやらむに射られ、死に給ひぬと、兄御前は、語らせ給ふぞや。當時、鎌倉殿のさりものにて、鎌倉より、伊豆へ下る時もあ

り、伊豆より、鎌倉へ上る時もありとや。われ等をも、殺さむとや思ふらむ。われ等が、この里にありと知らてや過ぐらむ」などと、おとなしく語りければ、母よりはじめて、女房たちまで、皆、袖をぞしぼりける。

かくて、夏も過ぎ、秋もたけ、九月十三夜の月、隈もなかりけるに、兄弟二人、庭に出てて、遊びけるに、五つ連れたる雁金の、南をさして飛びけるを見て、一萬、申しけるは、「あれ、見給へ、箱王殿。空に飛ぶつばさも、皆、別の翼をまじへざりける。五つ、つれたる鳥の中に、一つは父、一つは母、三つは子どもにてぞあるらむ。物いはぬ鳥類さへ、かくのごとし。われらは、人倫に生れながら、和殿は弟、我は兄、母は、まことの母なれども、曾我殿は、實の父にてましますぬこそ、かなしけれ。わが父をば、河津殿と申してあ

りしとかや。父だにも、世におはしますば、馬鞍をも賜はり、弓矢をも持ちて、今ぞ思ふやうに、物を射ありきなむ。われわれより、幼き者にては、馬鞍弓矢をもて、物を射ありく事の、羨しさよ。これらの事ども、思ひつゞくれば、いつより、今宵は、父御前のこひしくおはしますぞや」とて、袖に、顔を、さし入れて、さめざめと、泣きければ、弟も、こざがしく、顔を合せて、泣き居たり。一萬の乳母の女房、これを聞きつゝ、「あな、淺まし。人もこそさけ。いかに、和上郎達、夜も更けぬるに、さやうにては、おはするぞ。とくとく、入らせ給へ」と、怖しげにいひければ、二人のものは、門外へ逃げ出でて、おもふやうに、飽くまで泣きて後に、内に入りけり。

重衡卿海道くだり

(平家物語)

四の宮河原になりぬれば、昔、延喜第四の皇子蟬丸の、關の嵐に心をすまし、琵琶を弾き給ひしに、博雅の三位といひし人、風の吹く日も、吹かぬ日も、雨の降る夜も、降らぬ夜も、三年が間、歩を運び、立ち聞きて、かの三曲を傳へけむ、わら屋の床のいにしへも、おもひやられて哀なり。逢坂山をうち越えて、勢田の唐橋、駒もとどろと踏み鳴し、雲雀上れる野路の里、志賀の浦浪、春かけて、霞にくもる、鏡山、比良の高嶺を北にして、伊吹の嶽も、近づきぬ。心をとむとし、なけれども、荒れてなかなかやさしきは、不破の關屋の板廂、いかになるみの汐干潟、涙に袖は、しをれつゝ、かの在原のなにかしの、「唐衣きつゝ、馴れにし」と、詠めけむ、三河の國の八橋にも、なりぬれば「蜘蛛手にものを」と、あはれなり。濱名の橋を渡り給へば、松の梢に、

風さえて、入江にさわぐ、波の音、さらでも旅は、ものうきに、心をつくす、夕まぐれ、池田の宿に、着き給ひぬ。その宿のなにかしが許に、その夜は、宿せられけり。その女侍従、三位の中將殿を見奉りて「日ごろは、つてにだに思し召し寄り給はぬ人の、今日、かゝる所へ入らせ給ふことの不思議さよ」とて一首の歌を奉る。

旅の空はにふの小屋のいぶせきに

ふるさといかに戀ひしかるらむ

中將の返事に、

故里もこひしくもなしたびのそら

みやこも遂のすみかならねば

都を出でて、日數経れば、三月もなかば過ぎ、春も、既に暮れなむとす。遠山の花は、のこりの雪かと見えて、浦々島々、かすみわたり、

來し方、行く末の事ども、思ひ續け給ふにも、「こは、されば、いかなる宿業のうたてさぞ」と、のたまひて、たゞ盡せぬものは、涙なり。御子の、一人もおはせぬことを、母の三位殿も歎き、北の方、大納言の佐殿も、本意なきことにし給ひて、萬の神佛にかけて、祈り申されけれども、そのしるしなし。「かしくぞ、なかりける。子だにもあらましかば、いかばかり思ふ事あらむ」と、のたまひけるこそ、せめての事なれ。小夜の中山にかかり給ふにも、「また越ゆべし」とも覺えねば、いとどあはれの數そひて、袂ぞいたく、ねれまざる。うつ山邊の蔦の道、心細くも、うつ越えて、手ごしを過ぎて行けば、北に遠ざかりて、雪白き山あり。問へば、甲斐の白峰といふ。その時、三位の中將、落つる涙をおさへつゝ、

惜しからぬ命なれども今日までに

つれなきかひの白ねをも見つ

清見が關うち越えて、富士の裾野になりねれば、北には青山峩々として松吹く風、颯々たり。南には、蒼海漫々として、岸打つ浪も、茫々たり。名にしおふ、足柄の山うち越えて、こゆるぎの森、鞠子川、小磯の浦々、やつまと、とかみが原、見こし崎をも、うち過ぎて、いそがぬ旅とはおもへども、日數、やうやう重れば、鎌倉にこそ、入りたまへ。

笠置山

(太平記)

さる程に、類火、東西より吹かれて、餘煙、皇居にかゝりければ、主上を始めまゐらせて、宮々、卿相雲客、皆、歩跳なる體にて、いづくをさすともなく、足に任せて落ち行き給ふ。この人々、はじめ、一二町

が程こそ主上を扶けまゐらせて、前後に御供をも申されたりけれ。雨風烈しく、道闇くして、敵の鬨の聲、ここかしこに聞えければ、次第に別々になりて、後にはたゞ、藤房、季房二人より外は、主上の御手をひきまゐらする人もなし。忝くも、十善の天子、玉體を田夫野人の形に替へさせ給ひて、そのことも知らず、迷ひ出てさせ給ひける御有様こそ、あさましけれ。いかにもして、夜の内に、赤坂の城へと、御心ばかりを盡されけれども、假にも、未だ習はせ給はぬ御歩行なれば、夢路をたどる御心地して、一足には休み、二足には立ち止り、晝は、道の傍なる青塚の蔭に、御身を隠させ給ひて、寒草の疎なるを御座の茵とし、夜は、人も通はぬ野原の露、分け迷はせ給ひて、羅敷の御袖をほしあへず。とかうして、夜晝三日に、山城の多賀の郡なる有王山の麓まで、落ちさせ給ひけり。

藤房、季房も、三日まで、口中の食を断ちければ、足たゆみ、身疲れて、今は、いかなる目に逢ふとも、逃げぬべき心地せざりければ、せむ方なくて、幽谷の岩を枕にて、君臣、兄弟、諸共に、うつゝの夢に伏し給ふ。梢を拂ふ松の風を、雨の降るかと思し召して、木蔭に立ち寄せ給ひければ、下露の、はらはらと、御袖にかゝりけるを、主上、御覽ぜられて、

さしてゆく、笠置の山を、出でしより、

あめがしたには、かくれがもなし。

藤房卿、涙をおさへて、

いかにせむ、頼む蔭とて、たちよれば、

なほそでぬらす、まつのまたつゆ。

俊基朝臣の東下り

(太平記)

落花の雪に、踏み迷ふ、片野の春の、櫻がり、紅葉の錦を、着て歸る、嵐の山の、秋の暮、一夜をあかす、程だにも、旅寝となれば、ものうきに、恩愛の契、浅からぬ、わが古里の、妻子をば、行くへも、知らず、思ひ置き、年久しくも、住み馴れし、九重の帝都をば、今を限と顧みて、思はぬ旅に、出て給ふ、心の中ぞ、哀なる。憂をばとめぬ、逢坂の、關の清水に、袖ぬれて、末は山路を、うちての濱、沖を遙に見渡せば、鹽ならぬ海に、こがれ行く、身を浮舟の、うき沈み、駒もとどろと踏み鳴す、勢田の長橋、うち渡り、行きかふ人に、あふみ路や、世をうねの野に、鳴く鶴たづも、子を思ふかと、あはれなり。時雨もいたく、もる山の、木の下露に、袖ぬれて、風に露ちる、篠原や、篠分くる道を、過ぎ行けば、鏡の山は、ありとても、涙に曇りて、見え

わかず。物を思へば、夜の間にも、老蘇の森の、下草に、駒を留めて顧る、古郷を雲や、隔つらむ。番馬、醒井、柏原、不破の關やは、荒れはてし、なほもるものは、秋の雨の、いつかわが身の、をはりなる、熱田の八劍、伏し拜み、汐干に今や、なるみ鴻、傾く月に、道見えて、明けぬ暮れぬと、行く道の、末はいづくと、とほたふみ、濱名の橋の夕汐に、引く人もなき、捨小舟、沈み果てぬる、身にしあれば、誰かあはれと、ゆふ暮の、いりあひなれば、今はとて、池田の宿に、着き給ふ。(中略)

旅館の燈、幽にして、鶏鳴曉を催せば、匹馬、風に嘶いいて、天龍川をうち渡り、小夜の中山越え行けば、白雲道を埋み來て、そことも知らぬ、夕暮に、家郷の天を、望みても、昔、西行法師が「命なりけりと詠じつゝ、二度越えし、跡までも、うらやましくぞ思はれける。

隙行く駒の、足はやみ、日已に亭午に昇れば、餉參するほどとて、輿を庭前にかきとどむ、轅を叩いて、警固の武士を近づけ、宿の名を問ひ給ふに、「菊川と申すなり」と、答へければ、承久の合戦の時、院宣書さたりし咎によりて、光親卿、關東へ召し下されしが、この宿にて誅せられし時、

昔南陽縣菊水。 汲下流而延齡。

今東海道菊河。 宿西岸而終命。

と書きたりし、遠き昔の筆の跡、今は、わが身の上になり、あはれや、いとどまさりけむ、一首の歌を詠じて、宿の柱にぞ書かれける。

古もかゝるためしをさく川のちなじながれに身をや沈めむ。

大井川を過ぎ給へば、都にありし名を聞きて、龜山殿の行幸の、嵐の山の花盛、龍頭鶴首の舟に乗り、詩歌管絃の宴に侍りし事も、今は二

度見ぬ世の夢となりぬと、思ひ續け給ふ。島田、藤枝にかゝりて、岡部の眞葛、うら枯れて、物悲しき夕暮に、うつ山邊を越え行けば、蔦楓、いと茂りて、道もなし。昔、業平の中將の、すみかを求むとて、東の方に下るとて、「夢にも人に逢はぬなりけり」と、詠みたりしも、かくやと、思ひ知られたり。清見瀉を過ぎ給へば、都に歸る夢をさへ、返さぬ浪の、關守に、いとど涙を催され、向ひはいづこ、三穗崎、沖津、蒲原、うち過ぎて、富士の高嶺を見給へば、雪の中より、立つ煙、上なき思ひに、たぐへつゝ、明くる霞に、松見えて、浮島が原を過ぎ行けば、沙干や浅き船うけて、ちり立つ田子の、みづからも、憂世を遶る、車返し、竹の下道、行き惱む、足柄山の峠より、大磯小磯、見おろして、袖にも波は、こゆるぎの、急ぐとしもは、なけれども、日數つもりて、七月二十六日のくれほどに、鎌倉にこそ、着き給ひけれ。

大塔宮熊野落

(太平記)

大塔宮二品親王は、笠置の城の安否を聞き召されむために、暫く南都の般若寺に忍びて御座ありけるが、笠置のすてに落ちて、主上囚はれさせ給ひぬ、と聞きしかば、虎の尾を履む恐、御身の上に迫りて、天地廣しといへども、御身を藏めらるべき所なし。日月明かなりといへども、長夜に迷へる心地して、晝は野原の草に隠れて、露に臥す鶉の床に、御涙を争ひ、夜は孤村の辻にイみて、人を咎むる里の犬に、御心を惱まされ、何處とて、御心安かるべき所なかりければ、かくても暫時はと思し召されける處に、一條院の候人按察法眼好專、いかにして聞きたりけむ、五百餘騎を率して、未明に般若寺へぞ寄せたりける。(中略)

* * * * *

かくては、南都邊の御隠家も叶ひ難ければ、則ち般若寺を御出てありて、熊野の方へぞ落ちさせ給ひける。御供の衆には光林坊玄尊・赤松津師則祐・木寺相模・岡本三河坊・武藏坊・村上彦四郎・片岡八郎・矢田彦七・平賀三郎・彼此以上九人なり。宮を始め奉りて、御供の者までも皆柿の衣に笈を掛け、頭巾肩半に責め、その中に年長せるを先達に作り立て、田舎山伏の熊野參詣する體にぞ見せたりける。

この君、元より龍樓鳳闕の内に人とならせ給ひて、華軒香車の外を出でさせ給はぬ御事なれば、御歩行の長途は定めて叶はせ給はじし、と御伴の人人、かねては心苦しく思ひけるに、案に相違して、いつ習はせ給ひたる御事ならねども、怪しげなる單皮、脚巾、草鞋を召して、少しも草臥たる御氣色もなく、社々の奉幣、宿々の御勤懈らせ給はざりければ、路次に行き逢ひける道者も、勤修を積める先達も、見尤む

る事なかりけり。由良の湊を見渡せば、澳漕ぐ船の櫂をたへ、浦の濱ゆふ幾重とも、知らぬ浪路に鳴く千鳥、紀伊路の遠山渺々と、藤代の松にかかれる磯の浪、和歌吹上を外に見て、月に瑩ける玉津島、光も今はさらでだに、長汀曲浦の旅の路、心を碎く習なるに、雨を含める孤村の樹、夕を送る遠寺の鐘、哀を催す時しもあれ、切目の王子に着き給ふ。

其夜は、叢祠の露に御袖をかたしきて、通夜、祈り申させたまひ、(中略)未明に、十津川を尋ねてぞ、分け入らせ給ひける。

その道のほど、三十里が間には、絶えて人里もなかりければ、或は、高峰の雲に、枕を敬て、苔の筵に、袖を敷き、或は、岩漏る水に渴を忍んで、朽ちたる橋に、肝を消す。山路、もとより雨なうして、空翠、常に衣を濕す。見上ぐれば、萬仞の青壁、刀に削り、見下せば、千丈

の碧潭、藍に染めり。數日の間、かかる嶮難を経させ給へば、御身も、くたびれはてし、流る汗、水の如し。御足は、缺け損じて、草鞋、皆、血に染れり。御供の人々も、皆、その身、鐵石にあらざれば、皆々、飢ゑ疲れて、はかばかしくも歩み得ざりけれども、御腰を押し、御手を引きて、路の程十三日に、十津河へぞ着かせ給ひける。

吉野の合戦

(太平記)

元弘三年正月十六日、二階堂出羽入道道灌、六萬餘騎の勢にて、大塔宮の籠らせ給へる吉野の城へ押し寄す。菜摘河の川淀より、城の方を見上げたれば、峰には、白旗、赤旗、錦の旗、深山ちろしに吹きなびかされて、雲か、花かと、怪まる、麓には數千の官軍、冑の星を輝し、鎧の袖を連ねて、錦繡を敷ける地の如し。峰、高うして道細く、

山、峻しくして、苔、滑なり。されば、幾十萬騎の勢にて責むとも、たやすく落つべしとは、見えざりけり。(中略)

* * * * *

さる程に、搦手の兵、思ひもよらぬ、勝手の明神の前より押し寄せ、宮の御座ありける、藏王堂へ打つて懸りける間、大塔宮、今は、遁れぬ所なりと思し召し切つて、赤地の錦の鎧直垂に、緋緘の鎧の、まだ已刻ばかりなるを隙間もなく召され、龍頭の冑の緒をしめ、三尺五寸の小長刀を、脇に挟み、劣らぬ兵ども廿餘人、前後左右に立ち、敵のむらがりて控へたる中に、走り懸り、東西を拂ひ、南北へ追ひ廻し、黒煙を立て、切つて廻らせ給ふに、寄手、大勢なりといへども、僅の小勢に切り立てられ、木葉の風に散るが如く、四方の谷へ、颯と引く。敵引けば、宮は、藏王堂の大庭に並み居させ給ひて、大幕うち

揚げて、最後の御酒宴あり。宮の御鎧に立つ所の矢七筋、頬先、二の御腕、二個所、つかれさせ給ひて、血の流るゝ事瀧の如し。然れども、立ちたる矢をも、抜き給はず、流るゝ血をも、拭ひ給はず、敷皮の上に立ちながら、大盃を三度傾けさせ給へば、小寺相模、四尺三寸の太刀の鋒に、敵の首を刺し貫きて、宮の御前に畏り、「戈鋌、劍戟を降すこと、電光の如くなり、磐石、岩を飛すこと、春の雨に相同じ。然りといへども、天帝の身には近づかて、修羅、かれが爲に破らる」と、はやしを揚げて舞ひたる有様は、漢楚の、鴻門に會せし時、楚の項伯と項莊とが、劍を抜いて舞ひしに、樊噲、庭に立ちながら、帷幕をかゝげて、項王を睨みし勢も、かくやと覺ゆるばかりなり。大手の合戦、急なりと覺えて、敵、御方の鬨の聲、相交りてきこえけるが、げにもその戦に、自ら相當る事、多かりけりと見えて、村上彦四郎義光、鎧に

立つ所の矢十六筋、枯野に残る冬草の、風にふしたる如くに折り懸けて、宮の御前に参りて、申しけるは、「大手の木戸、いひがひなく攻め破られつる間、二の木戸に支へて、數刻、相戦ひしに、御所中の御酒宴の聲、すさまじく聞え候ひつるにつけて、参りて候ふ。敵、已に、かさに上りて、御方の氣の、つかれ候ひぬれば、この城にて、功を立て事、今はかなはじと覺え候ふ。未だ、敵の勢を、よそへ廻し候はぬ先に、一方を打ち破つて、ひとまづ落ちて御覽あるべしと、存じ候。但し、跡に残り留りて、戦ふ兵なくば、御所の落ちさせ給ふものなりと心得て、敵いづくまでも、續いて、追ひ懸け参せむと、覺え候へば、恐ある事にて候へども、召されて候ふ、錦の御鎧直垂と、御物の具とを下し給りて、御諱の字を犯して、敵を欺き、御命に代り進せむと、申しければ、宮、「いかでか、さる事あるべき。死なば一所にてこそ」と

もかくもならめ」と、仰せられけるを、義光詞を荒らかにして、「かゝるあさましき御事や候。漢の高祖、滎陽に圍まれし時、紀信、高祖の眞似をして、楚を欺かむと乞ひしをば、高祖、これを許し給ひ候はずや。これ程にいひがひなき御所存にて、天下の大事を、思し召し立ちけるこそうたてけれ。はや、その御物の具を、脱がせ給ひ候へ」と申して、御鎧の上帯を解き奉れば、宮、げにもとや思し召しけむ、御物の具、鎧直垂まで、脱ぎかへさせ給ひて、「われ、もし生きたらば、汝が後生を弔ふべし、共に、敵の手にかゝらば、冥途までも、同じ岐に伴ふべし」と、仰せられて、御涙を流させ給ひながらも、勝手の明神の御前を、南へ向つて、落ちさせ給へば、義光は、二の木戸の高櫓に上り、遙に見送り奉りて、宮の御後影の、かすかに隔らせ給ひぬるを見て、今はかうと思ひければ、櫓のはざまの板を切り落して、身をあら

はにして、大音聲を揚げて、名のりけるは、「天照大神の御子孫、神武天皇より九十五代の帝、後醍醐天皇第二の皇子一品兵部卿親王尊仁、逆臣の爲に亡され、恨を泉下に報せむ爲に、たゞ今、自害する有様、見置きて、汝等が武運忽に盡きて、腹を切らんずる時の手本にせよ」と、いふまゝに、鎧を脱ぎて、櫓より下へ投げ落し、錦の鎧直垂の袴ばかりに、練貫の二重小袖を、押し膚脱いで、白く清けなる膚に、刀を突き立て、左の脇より、右のそば腹まで、一文字にかき切つて、腸つかんで、櫓の板に投げつけ、太刀を、口に銜へて、うつ伏に成つてぞ、臥したりける。

櫻井の訣別

(太平記)

正成、これを、最後の合戦と思ひければ、嫡子正行が、今年十一歳にて供したりけるを、思ふやうありとて、櫻井の宿より、河内へ返し遣すとて、庭訓を残しけるは、「獅子、子を産んで、三日を経る時、數千丈の石壁より、これを投ぐ。其子、獅子の機分あれば、教へざるに、中より、はね返りて、死する事なしといへり。况や、汝、已に十歳に餘りぬ。一言耳に留らば、わが教誡に違ふ事なかれ。今度の合戦、天下の安否を思ふ間、今生にて汝が顔を見む事、これを限と思ふなり。正成、已に討死すと聞きなば、天下は、必ず、將軍の世に成りぬと、心得べし。然りといへども、一旦の身命を助らむ爲に、多年の忠烈を失ひて、降人に出る事、あるべからず。一族若黨の、一人も死に残つてあらむ程は、金剛山の邊に引き籠つて、敵、寄せ來らば、命を、養由が矢先に懸けて、義を、紀信が忠に比すべし。これ、汝が第一の孝行ならんずるぞ」と、泣く泣く申し含めて、各、東西へ別れにけり。

最期の参内

(太平記)

京勢雲霞の如く淀・八幡に着きぬと聞えしかば、楠帶刀正行・舍弟正時一族うち連れて十二月廿七日芳野の皇居に参じ四條中納言隆資を以て申しけるは、「父正成庭弱の身を以て大敵の威を碎き、先朝の宸襟を休め進らせ候ひし後、天下程なく亂れて逆臣西國より攻め上り候ふ間、危きを見て命を致す處、かねて思ひ定め候ひけるに依りて、遂に攝州湊河にて討死仕り候ひ訖んぬ。其時正行十三歳に罷りなり候ひしを、合戦の場へは伴はで河内へ歸し『死に残り候はんずる一族を扶持し、朝敵を亡し君を御代に即け進せよ』と申し置きて死して候ふ。然るに正行・正時已に壯年に及び候ひぬ。此の度我と手を碎き合戦仕り候はずば、且は亡父の申し、遺言に違ひ、且は武略のいふがひなき謗に落つべく覺え候ふ。有待の身思ふに任せぬ習ひにて、病に冒

散

(114)

文

袖 珍 名 文 集 覽

(115)

され早世仕る事も候ひなば、只君の御爲には不忠の身となり父の爲には不孝の子となるべきにて候ふ間、今度師直・師泰に懸け合ひ身命を盡し合戦仕りて彼れ等が頭を正行が手に懸けて取り候ふか、正行・正時が首を彼れ等に取りられ候ふか、其二つの中に戦の雌雄を決すべきにて候へば、今生にて今一度君の龍顔を拜し奉らむために参内仕りて候ふ」と申しもあへず、涙を鎧の袖にかけて義心其氣色に顯れければ傳奏いまだ奏せざる先に、まづ直衣の袖をぞぬらされける。主上則南殿の御簾を高く捲かせて、玉顔殊に麗しく諸卒を照臨ありて正行を近く召して「以前兩度の戦に勝つ事を得て敵軍に氣を屈せしむ。叡慮先づ憤を慰する條、累代の武功返す返すも神妙なり。大敵今勢を盡して向ふなれば、今度の合戦天下の安否たるべし。進退度に當り變化機に應ずる事は勇士の心とする處なれば、今度の合

戦手を下すべきにあらずといへども、進むべきを知りて進むは時を失はざらむがためなり、退くべきを見て退くは後を全うせむがためなり。睨汝を以つて股肱とす。慎みて命を全うすべし」と仰せ出されければ、正行頭を地につけてとかくの勅答に及ばず、只是れを最期の参内なりと思ひ定めて退出す。

返らじと兼て思へば梓弓

亡き数に在る名をぞとむる

とても世に永らふべくもあらぬ身の

かりの契ちぎりないかて結ばん

熊王發心

(吉野拾遺)

大夫判官赤松光範が、津の國のかためなりける時、左馬頭正儀に、度々、はかられけるを、口をししく思ひこめて、過し侍りけるに、去ぬ

る住吉の戦に討たれて失せし、宇野の六郎といひしが子に、熊王といひけるが、まだ、をさなき時、光範にいひけるは、「正儀はわがためにも、親の敵にてさぶらへば、いかにもして、撃ち侍らむ。河内へ越えて、正儀に仕へ侍らむに、をさなく候へば、などか、心をゆるし申さぬことのなかるべき。たとひ、心をゆるすことの侍らずとも、七とせ八とせ程も、仕へ候はゞ、そのうちには、撃ちぬべきたよりのいかでなからむ。御暇をこそ賜はらめ」と、涙をながせば、光範も、いとあはれと思ひながら、「をさなければ、敵の國へやらむも、こゝろもとなし、又は、命にかはりて、うたれしものゝ子なれば、かたみともこそ思ふべけれ」と、しひてとどめ給ひけれども「すこしおとなしくなりなば、よも、近づけ給はじ、をさなくありなん時、参りてこそ」と、しきりに、のぞみければ、力、および給はて、常に、身をはなち給は

ざりし刀を賜ひて、「これにて、本意とげよ」とて、阿部野まで、人あまたそへて、やらせけるに、それよりは、我にひとしき童一人を具して、赤坂の城にゆきて、そのほとりに、たゞずみてありけるを、兵庫介忠元が、見つけて、「いかなる人にかおはすらむ」と、尋ねられて、「われこそは大夫尉光範の侍にて、宇野の六郎といひけるもの、小子に、熊王といふものにて候へ。父にて侍る六郎は、去にし時、住吉の戦に、うたれて候ふを、一門にて侍る備後守が、我をおひうちて、領地を奪ひ候へども、光範と心を合せ候へば、せむかたなくて、いかなる寺へも入り侍りて、僧法師にもなり、父のあとを吊ひ候はむがために、さすらへ侍り」と、いひけるを、あはれと聞きて、まづ、わがかたにともなひて、さまざま、いたはりて、後に、正儀に、ありつる事をかたりて、「をさなくは候へど、心のさかさかしくて」など、申すに、

あはれがり給ひて、召しよせ給へり。もとより、なさけある人なりければ、熊王も、おもひつきて、親のあだをも忘れにけるにや、よく、宮仕しけり。十五程になりければ、河内の國にてすこしなる所をしらさむといひけれども、「恥ある一矢をも射さぶらひてこそ」とて、辭しにけり。

あくる年の春、父が七めぐりに當りけるに、思ひつけて、こよひ、正儀を撃ちて、父の手向にもし、光範の心をもやすめ奉らむと、思ひたちてありけるに、その日、御前に召して、「今日は、吉日にてあるなれば、元服せよかし」とて、和田和泉守に、もとどり、とりあげさせて、和田小次郎正寛と名のらせ、吉野殿より賜はせける鎧を賜ひければ、涙を袖にかけてよろこぶ。夜に入るまで、正儀の御前にありけるが、又、ふと思ひ出で、撃ち奉らむならば、こよひこそと思ひて、膝をお

し直して、正儀に、目をかくれば、年ごろの情深かりしこと、今日の元服の事など思ひつゞけて、いかで、情なく撃ち奉らむと思ひかへして、心をしづむれば、父の敵といひ、譜代の主君のあだといひ、一かたならねばと、思ひ定めけれども、何心もなくわたらせ給ふありさまを見ければ、御いたはしくて、堪へかねけるにや、廣椽に出でて、聲をあげて、泣きさげぶを、人々も、正儀も、おぼつかなく思ひ給ひて、障子を開き見給へるに、ふししづめるさまの、たゞには見えずありければ、「いかにか」と、問はせ給ひければ、ありつる心のうちを申して、「とにかくに、君のため、父のために、みづから、死なんより外は、候はず」とて、刀をとりなほせば、ありつる人ども、皆、涙にくれてありながら、「いかで、さはあらむ」と、とりつきて、はたらかせねば、力およばで、その刀にて、もとどりおしきり、往生院にて、形をかへ、

君より賜はせる名なればとて、正寛法師とぞいひける。寺の傍に、草の庵を結びて、もしも、心のかはることのありもやせむとて、往生院の門の外へは、出でずして、行ひてありけり。光範より賜はせける刀は、ありしありさまを、委しく、書きそへて、かへしけりとかや。いと、あはれなりける事にこそ。

祭のことば

(村田春海)

こゝに、文化の五とせ、九月八日、平春海、謹みて、芳宣園大人のおくつきの御前に、菊の初花、一枝をたむけ、香の木、一ひらをたきて、うなねつきて、申さく。あはれ、悲しきかも。君は、われに、十といひて、一とせの、このかみにおはすなるが、今、そのかみを思ひ出づるに、君は、まさに、さかりの齡におはして、われは、

まだ、童にてぞ侍りける。常に、縣居の庭に、物まなびにゆきかひ
 たる時、朝にまゐるとしては、君の御はかしの後に従ひ、夕にまかる
 とては、君の御袖のもとにすがりて、あひうるはしみまつれること、
 親子、はらからにても、なにか、ことならむ。書よむとては、君を
 師ともたふとみ、歌作るとしては、われをれととひのつらにぞ教へ給
 ひける。中頃にして、君は、つかへの道に暇なくおはし、われは、世
 のさがにかしづらひて、ちのづから、疎き方にも過ぎつるを、君、
 つかへを退き給ひて後は、われも、同じ衢にうつり住めば、花をた
 づぬとては、われ、道しるべをなし、月を思ふとては、君が舟に、
 あひ乗り、うきことも、ともに、うれへ、うれしきふしも、ともに、
 喜びて、世にありふるわざの、まめごとも、あだごとも、かたみに、
 へだてなく、心をかはせること、今にはたとせ。そのはじめを、く

りかへし數ふれば、あひ友たること、既に、五十とせにぞあまりけ
 る。さるを、今、おくれ奉りて、いつの世にか、あひ見む。いづれ
 の時にか、こととはむ。つねなきは、人の身のならひぞと知るも、
 これを、いかでか、歎かざらむ。かゝるを、誰かは、よく堪へむ。
 あはれ、悲しきかも。文の林、世々に衰へ。言の葉の道、日々に下
 り行けるを、賀茂の翁、世に出で、今を捨て、古にかへり、青雲
 の高き心まらひを求め、まづ機の、あやなるみやびごとを尊みいへ
 れど、株を守り、舟にきだつくるともがら、かれになづみ、こゝに
 ひかれて、猶、あやしみ答むるたぐひはおほく、たまあひて、よく、
 うけひく人なむ稀なりしを、君ひとり、心をおこして、あまねく、
 さとし、ひろく、誘ひしより、ちかき人は、まのあたり、あひうづ
 なひ、とほき人は、はるかに、なびき來て、古ぶりの歌、世にさか

りになりたるは、まことに、君の力によりてなり。その、みづから、よみ出で給へる歌を見るに、ふるき調、新しき姿、とりどりに、備らざるなし。その古をうつせるは、藤原、寧樂の御世におよび、後の巧に習へるは、堀河、鳥羽の御時に下らず。心に思ふことは、口に盡さざる事なく、目に觸るゝものは、詞にのほせざることなむあらざりける。これを見て、高さも、短さも、愛て尊ばざる人なし。また、事ごのみの人は、その名を、君に知られては、身のおもておこしと思ひて、世にも誇り、君の一歌を得るは、「價なき寶にもかへじ」といひてぞ、深く、喜びける。さるを、今、金の聲、忽ち、止みて、玉の響、再び、きこえずなりぬるは、わがどちのなげきのみかは、大方の世人の憂ともいひつべし。これをいかてか、惜まざらむ。かゝるを、誰かは、またはざらむ。あはれ、悲しきかも。わが、

かく、ことあげするを、泉の下にも、さやかに、きこし召し、天がけりても、はるかに、みそなはせとなむ申す。(春海著琴後集)

水 蓼

(萩原廣道)

天保の八年といふ年の、夏の頃、世の中の、はしたなきわたらひわざにつきて、上道郡なる、龍口山の麓に、日毎に、通ふ事ありけり。まだきより、起き出でつゝ、かへさは、いつも、ひるすぐるほどなり。今日は、六月の望の日なれば、暑きこと、又、いふべくもあらぬに、いつもの如く、起き出で、笠の紐、結びなどするほどに、父の命の、の給ふやう、このあつき日にさらされて、一里にあまれる道の程を、歸り來むには、忽に、あしき氣を蒙りて、重き病もいで來なむと、蓼てふ草ぞ、さる氣を拂ふなると、昔より、人も

いひ、まことに、しるしあるものなれば、これ持ちて、行けかし」とて、御みづから、門邊なる蓼の、いさゝかばかり、穂に出でたるを、よき程に、つみとらして、賜りしを、何ばかりの事とも思はずりしかど、たゞ、みけしきあしからむと思へばさるおも、ちもせて、袖にして、出で行きつ。

かしこのいとなみはてし、歸り來るに、この頃は、日を経て、雨降らざりしかば、地さへさけて、照りつゞきたるけの、いとどしくまさりゆき、行手の道芝も、しなえよられ、田の面にすだく蛙だに、こゝかしの隈々にかくれて、息つき居たる程なれば、暑き事、いはむ方なし。小川の塘をたどり行く程に、額の汗を拭ふとて、袖なる手拭をとうでけるにつきて、この賜りづる蓼の穂の、いたうしをれてぞ、出できたる。思へば、いとも、かしてかりけり。人の親の

心ほど、よにも、あはれに、くまなくたらひたるものはあらず。たけだち、人なみになれる子の、はつかなる道のほどの上をさへ、御心に、深く、かけ給ひて、この蓼まで、賜りつる御心は、よる光るらむ玉は、ものかは、いかならむ寶位にも、たぐふべきものは、あらずなるを、かたじけなしとも、思ひたらず、中々、老人のならひとさへに思ひあざみて、かく、しなぶるまで、忘れはてたる心こそは、あさましなどは、愚にて、われながら、いたう、いぶかしけれとさへ思ふに、いとゞ涙のはふり落ちて、かしくも、おぼえければ、ひとつ、ひとつ、ひきのして、あまたゞび、おしいたゞき、半を分ちて、うち食ひつゝ、

夏の日の、あつきめぐみを、水蓼の、

ほとほと忘れ、はつべかりけり。

と、いふ時、涙、さらに、さと、ほとばしり出で、とどまるべくもあらず。道ゆく人の、あやしとや思ふらむと、笠ゆりかたぶけて、おもてをかくしつゝ、なほ、つらつら、來し方を思ひつゞけ行くに、七つといひける年の秋、母の命の、世を去り給ひし後は、この一所の御蔭にかくれて、あまたの年月を、思ひのまゝに、人となりける、そのほどの御いつくしみは、いかばかりなりけむ、濱の眞砂にも、よみなぞらへつべしやは。さるを、つゆ、報い奉らむとは、思ひもかけず、水し女一人だに、えつかはぬ家にすまへば、朝な夕な、おのづからに、なれまゐらせて、たちふるまひのなめげなるは、さるものにて、くだくだしう、苦しげなる家の内の事どもをさへ、うちまかせ奉りおきて、猶、心ゆかぬをりをりは、「いかで、かうは」など、うちつぶやき、御性として、酒を呑むことを、こよなう、好み

給へば、おのづから、また、怠り給ふことの、なきにはあらぬをりなどもあれば、なまさかしげに、諫め奉りなどしけるは、すべて、いかなる、ひがひがしき心なりけむ。やまと、もろこしの人の子の、あはれなる例にひける事どもを、書にも見、人にも聞けど、身をなきものにして、親のこのまじうし給へるかたに、走り惑ひたりこそ、いづれも、いづれも、傳へにたれ。せめて、さばかりならずともなど、さまざま、悔しうかきみだりて、うつし心もなきまでに、音にたてし、よくと、うち泣かれぬ。人のいたう、のしり騒ぐ聲に、心づきて見れば、足もともおぼえて、早くも、御野川の堤に來にけり。

わたし舟、待つほどに、木かけに、やくらひて、眺めやれば、鱒といふ魚の、今年は、殊に、多かなりとて、里人ども、集りて、網

を引きつゝ、捕ふるなりけり。常には、めづらかなるものなれば、懐なりける錢のこりなくとり出て、中に、大きやかなるを買ひとりて、藁に包みて、もて歸り來りつれば、父の命の、待ちつけおはして、「今日は、いと、早かりしな。暑さに、疲れたらむを、憩へ」など、例の如く、の給ふにも、この永き日を、只、御身一人にて、なすこともなく、日毎に、待ちつけ給ひぬるは、いかばかり、わびしうおはしけむと、思ふに、まづ、胸、つと、ふたがりて、ものものはれず。からうじて、まぎらはしつゝ、かの魚をとり出で、焼きもし、なますにもして、さて、奉らむと思ふ時、「いかばかり、うるはしき饗なりとも、酒なくては」と、常に、の給ひしをと、思ひ出づるに、買ふものあらざれば、さらぬやうにて、市に出で行き、單衣一つ、賣りものして、いさゝかの酒を買ひとり、徳利といふものに

入れて、みづから、提げて、走り歸り、「今日は、御野川にて、鱒、いと、さはに、取れ侍りしが、めづらかに、覺え侍るまゝに、買ひもて歸れり。また、酒も、いさゝか、買ひおき侍るを、めし給ひなむや」と、いへば、「めづらかなり。とく、もてまゐれ」と、の給ふまゝに、めしよせて、「こはいかなるさまして、その里人は、捕ふる」など、いといたう、多みまけ給ひて、おもほす事もなげに、の給ふにぞ、「しかじかのわざして、とり侍る」など、うち語らひつゝ、盃とり出で、勸め奉るうちにも、常にしも、かくて、あらむよしもがな。先つ年、なやましうせさせ給ひたるけにや、御年の程よりは、いたう、くつをれ給ひて、いと、弱うおはするものを、御心のまゝに、樂み給はむ道も、絶え果てたるこそ、いとも、かしく、悲しけれ。人なみなみの貧しさならば、猶、いかばかりも、せむやう

のありなむを、衰へはてたる家の内は、なに一つ、行ふべき業もなきぞ、悲しくも、又、悔しかりける。よし、さりとも、ほだしとならむ妻子どものなきこそは、中々、心安けれ。ありとあるもの、竊に、ものして、力のかぎり、つかうまつらむ。おのが身一つの上は、いかならむ巖の中にも、過さば、過しはてざらめやなど、思ふにも、魂消ゆる心ちして、ほれたるやうにて、つい居たるを、みそなはして、「面もちの、常にもあらざるは、心ちや、なやましき。すこしも早う、ねよかし」とて、盃を賜はりつるに、今更のやうに、胸ふたがりて、涙の落つること、とどめがたければ、御答も申さで、居たりしが、やうやうに、のどめて、何くれのをかきしき物語など、きこえつるに、夕暮近うなりて、いたく、酔ひ給ひけむ、夕食めしなから、ころぶしつゝ、熟睡し給ひぬ。いと、弱うなり給へりと見奉る

につけては、いはむかたもなく、苦しければ、蚊帳といふもの、ひきめぐらして、抱き入れまゐらせ、そこら、とり拂ひなどするに、月の光、涼しげに、澄み渡りて、東の妻戸より、さし入るにぞ、すこしは、心も、のどまるやうにてなむ。(萩原廣道文稿)

芳流閣上の格闘

(曲亭馬琴)

古の人云はずや、禍福は絆る繩の如く。人間萬事往として塞翁が馬ならぬは無し。そは福の倚る處、將禍の伏する所彼にあれば是にありとは思へども、豫てより、誰かよくその極めを知らむ。憐むべし、犬塚信乃は、親の遺言紀念の名刀、心に占つ身に附つ、艱苦の中に年を経て、得がたき時を得てしかば、遙々辭我へ齎して、名を揚げ家を興すべかりし、其福は禍と、ふり替りたる村雨の、刀は舊

の物ならで、我身を劈く讐とぞなりし、憾を爰に釋くよしもなく、
 絆急にして意外にあり。僅かに當座の辱めを、避ばやと思ふばかり
 に、夥の圍みを切開きて、芳流閣の屋の上に、攀登れども左に右に
 脱去るべき道のなければ、其所に必死を極めたる、心の中は如何な
 りけん。想像だにいと痛まし、されば又、犬飼現八信道は、犯せる
 罪のあらずして、月來獄舎に繋れし、禍は今、恩赦の福。我縛の索
 解けて、人にぞかゝる捕手の役義。犬塚信乃を搦めよとて、愍に擇
 み出されつ、他の憂を身の面目に、今更用ひられん事、願はしから
 ずと思へども、推辭て許さるべうもあらぬ、君命重く彌高き、彼樓
 閣は三層なり、其二層なる檐の上まで、身を霞ませて登りて見れば、
 足下遠く雲近く、照る日烈しく堪がたき、頃は六月廿一日、昨日
 も今日も乾蒸の燄熱をわたる敷瓦は凹凸隙なく波濤に似て、下には

大河滔々たる、こゝ生死の海に射る、洄潮は名におふ坂東太郎。水
 際の小舟楫を絶て。進退既に谷まりし、敵にとあればいかでわれ、
 繋ぎ留めんと語の樹傳ふ如くさらくと、登り果てたる三層の、屋
 背には目柴鬘すよしもなく、迭に透を窺ひつゝ、疾視あふて立た
 る形勢、浮圖の上なる鶴の巢を、巨蛇の窺ふに似たりけり。廣庭に
 は成氏朝臣、横堀史在村等の、老黨若黨、圍繞せし、床几に尻を打
 掛けて、勝負怎生にと向上たり。只、閣の東西には、身甲したる許多
 の士卒、槍長刀を晃かし、或は、箭を負ひ、弓杖突立、組で落なば
 繋留んとて、頂を反して之を觀る。加 旗外面は、連絲として、杳
 なる河水遶りて砌を浸せば、借使信乃、武事たけ膂力衰へず、能く
 現入に捷ち得るとも、墨氏が鷺鷥を借らざれば、虚空を翔るべくも
 あらず、魯般が雲の梯なければ、地上に下るべくもあらず、渠鳥な

らずも羅アミに入りぬ、獸ならずも狩場にあり。三寸息絶ゆれば緯みな休まん。脱れ果てじと見えたりける。當下ソントキ信乃の思ふ様、初層二層の屋の上まで、追登らんとせし兵等を、斫落しつる其後は、絶て近づく者なきに、今、唯、獨り來ぬるは、世に覺えある力士ならむ、這奴キヤツは是れ、膳臣カンシヤン巴使オミハテス提が。虎を暴テウチにする勇ある歟。又、富田の三郎か、鹿の角を裂く力ある歟、遮莫サバレ、一箇の敵なり。引組で差違チガへ、死するに難き事やはある。能き敵にこそござんなれ。目に物見せんと、血刀を袴の稜ソノもて、推拭ひ、高瀬の如き方桴ヘコムチに立たる儘に寄するを俟てば、現八も亦思ふ様、彼、犬塚が武藝勇悍、素より萬夫不當の敵なり。然れども搦め兼て、他の援を借る事あらば、獄舎の中より此役義に、擇出されし甲斐もなし。搦め捕るとも撃るゝとも、勝負を一時に決せんものと、思ひにければ、些も擬議せず。御掟ざ

ふと呼かけて、拿トルたる十手を閃かし、飛ぶが如くに、方桴ヘコムチの左の方より進登りて、組んとすれども寄せつけず、心得トキたりと鋭太刀風に、撃つを發石ハッと受留て、拂へば透さず込刀尖を、柱サて流す一上一下。迂る蕘を蹈駐て、頻に進む捕手の秘術彼方も劣らぬ手煉の働さ、炭より落す太刀筋を、あちこち外す虚々實々未だ勝負を判かざれば、廣庭なる主従士卒は、手に汗握らざるもなく、瞬もせず氣を籠めて、見るめもいと々迫なる、去るほどに犬塚信乃は、悔り難き現八が、武藝に敵を得たりけりと、思へば勇氣彌増て、刀尖キツサキより火の出るまで、寄ては返す太刀音被聲カケ、兩虎深山に挑む時、鏗然として風發り、二龍西潭に入る時、沛然として雲起るも、かくぞあるべき。春ならば、峰の霞か、夏ならば、夕の虹歟と見るばかりなる、いと高閣タカキヤの棟にして死を争ひし爲體テイダラク、世に未曾有の晴業なれば、現八は被籠キヨミの鏑クサ

肱當の端を、裏缺く迄に切裂れしかど、太刀を抜かず、信乃は刀の刃も續かて、初めに淺瘻を負ひしより、漸々に疼を覺れども、足場を揃て撓まず去らず、疊かけて撃太刀を、現八右手に受流がして、返す拳につけ入りつゝ、やつと被たる聲と共に、眉間を望で礮と打、十手を丁と受留る、信乃が刃は鏝際より、折れて遙に飛び失せつ。現八待たりと無手と組むを、そがまゝ左手に引着て、迭に利腕腕と拿り、振倒さんと曳聲合して、揉つ揉るゝ力足、此彼齋一踏にらし、河邊の方へ滾々と、身を輾ばせし覆車の米苞、坂より落すに異ならず、高低際しき、棧閣に、削成たる豊の勢ひ、止るべくもあらざめれど、迭に拿たる拳を緩めず。幾十尋なる屋の上より、未遙なる河水の底にはいらす。程もよし。水際に繋げる小舟の中へ、打累りつゝ撞と落れば、傾く舷と立浪に水と音も水烟、纜丁と張断て、

射る矢の如き早河の、真中へ吐出されつ。爾も追風と虚潮に、誘ふ水なる酒舟、往方もしらず成にけり。(八犬傳)

爲朝白峰の陵に詣づ

(曲亭馬琴)

かくて其日も暮れなんとする程に、と見れば群鴉星を負うて茂林に歸り樵夫月を戴いて家路に急く。かこちがましき虫の音に葉末の露ぞ濃やかなる。既に人跡絶えければ、爲朝は、ふりたる木の下に立よりて、衣服を更め、御墓に詣で見れば、千草は一叢の煙を残して、玉殿燈なく、秋螢は五更の夜を照して、荆棘路を塞げり。百石城や百官は紫の袖を列ぬ、朝政聞し食しける十善の君として、過世の悪業は脱れたまはず。青塚苔滑にして、白楊風に戦ぎ、旅魂幽靈、今何所にか仲吟したまふやらん。げに人界の富貴は、夢の中なる快

樂にて、妻子珍寶及王位も、身死しては伴侶ならず。さればとて三界の火宅を出て、永く九品の淨刹に至らんと、なほ容易にあらざらんめり。これを見彼を思ふにも我身の果は數ならで不覺に涙ぞ先だちける。折しもさし入る月光に、御廟の柱を見上くれば二首の歌を書きたり。

讚岐に詣て松山の津と申す所にて新院おはしましけん御跡を

尋ねしにかたもなかりしかば

松山の浪にながれて來し船の

やがて空しくなりにけるかな

白峯と申す所の御墓に参りて

よしや君むかしの玉の牀とても

かゝらん後はなにゝかはせん

仁安三年十月日圓位とあり。さては西行法師も去々年の冬、こゝへは参りけんうなづと點頭きつゝ、石の玉垣の斜なる、扉を押開きて躊躇し、さて申すよう、君十善万乗の聖主として、錦帳を北闕の月に輝かしたまひしも、今は懷土望郷の魂、玉體を南海の俗に混ず。露を拂つて御跡を尋ね奉れば、秋草泣いて涙を沃ぎ嵐に向つて君が墓を問へば、老檜悲んで心を傷ましむ。佛儀は見えずして、只朝露夕月を見る。法音は聞えずして、只松響鳥語を聞く。軒傾きては曉風寒く、夢破れては夜雨防ぎがたし。昔今の御有様、いと痛ましくも淺ましく思ひ奉れど、微臣が孤忠を述ふるに由なく、既に勢竭き力究りて、今生の誠忠を訴へ、後世の苦樂を共にし奉り、君に強顔つねなかりける者どもを悉くとり殺さばやと思ふのみ。はからずも大島を逃れ來て、尊靈を驚かし奉るものなりと申しはて、涙を潜然と落しつゝ、

やがて氷なす短刀を抜いて、腹に突きたてんとするに、怪しきかな手足忽たちまち地にしびれて、いかにともすべなし。時に兒こごが嶽の方に叢雲棚引きて、月は半面を顯はしながら、影いと暗く、電間なく閃きて御墓の中に散徹し、山嵐のいと凄じきに吹きちる木の葉もろともに、武者四五十騎前驅して出来たり、次に腰輿を昇くものは、すべて象の鼻、鳶の啄にて、左右の腋に翹立ちたり。(弓張月)

一寸法師

(御伽草子)

中頃のことなるに、津の國難波の里に、おうぢと姥と侍り。うば四十に及ぶまで、子のなきことを悲み、住吉にまゐり、なき子を祈り申すに、大明神、あはれとおぼしめして、四十一と申すに、たゞならずなりぬれば、おうぢ喜び限りなし、やがて十月と申すに、い

つくしきをのこをまうけたり。さりながら生れおちて後、せい一寸ありければ、やがて、其の名を一寸ぼうしと名づけられたり。年月をふる程に、はや十二三なるまでそだてぬれども、せいも人ならず、つくづくと思ひけるは、たゞものにてはあらず、たゞ、ばけ物ふせいにてこそ候へ。われいかなる罰のむくいにて、かやうのものをば、住吉より賜はりたるぞや、あさましさよと、見るめもふびんなり。夫婦思ひけるやうは、あの一寸法師めを、いづかたへも、やらばやと思ひけると申せば、やがて一寸法師、此のよし承り、親にもかやうに思はるゝは、くちをしき次第かな。いづ方へもゆかばやと思ひ、刀なくては、いかゞやと思ひ、針を一つ、姥に乞ひ給へば、とりいだしたびにける。すなはち麥藁にて、つか、さやをこしらへ、都へのぼらばやと思ひしが、しぜん舟なくてはいかゞあるべきとて、

又姥に、ごきと、箸とたべと申しうけ、なごりをしくとむれども、
 たち出でにけり。住吉の浦より、ごきを舟としてうちのりて、都へ
 どのぼりける。すみなれし難波のうらを、立ちいで、都へいそぐ
 わがこゝろかな。

かくて、鳥羽の津にもつきしかば、そこもとにのりすて、都に
 のぼり、こゝやかしこと見るほどに、四條五條の有様、心も詞にも
 およばれず。さて、三條の宰相殿と申す人のもとにたちよりて、物
 申さんといひければ、宰相殿はさこしめし、おもしろき聲と聞き、
 縁のはたへたち出で、御覽ずれども人もなし。

一寸法師、かくて、人にもふみ殺されんとて、ありつる下駄の下
 にて、物申さんと申せば、宰相殿、ふしぎのことかな、人は見え
 ずして、おもしろき聲にて呼ばゝる、出で、見ばやとおぼしめし、そ

こなる足駄、はかんとめされければ、あしだの下より、人な踏ませ
 給ひそと申すべしげにおもひければ、いつきやうなるものにてあり
 けり。宰相殿御覽じてげにおもしろきものなりとて、御わらひな
 られけり。

貪婪國

(曲亭馬琴)

夢想兵衛は貪婪國の形勢ありさまに呆あきれて、門かどに立ち袖につけども慈悲善
 根と云ふことを知らぬ國なれば、一擲ひとつかみの手の内くれるものなく飢え
 疲れて、今は一步も運びがたければ、南を受けたる十字街よっかどに、大さ
 なる家造いへづくろの窓の下に立佇たぐずめば、むかうより來る岩壘がんどう阿爺あや、七つさが
 りの絹羽織きぬはねおり、かへし小紋こもんの肩はげし、頭の霜は備前陶びぜんとうを、灰にくべ
 たる俵おもかけあり。洗ひざらしの松坂縞まつざかごに、木綿小倉よたへおびの二重帯ふたへおび、曲まがり形かたちな

る古雪踏と、金は減らさぬ身だしなみ。左手に松魚引提げて、右手に持たる一把の薪を、町中に撲地とちき、よしない物を貰ふた故に、三十二文の損をする、忌々しいと獨言して松魚を薪の上に載せ、なほくどくくと呟ぐは、捨てに來たかと夢想兵衛は、訝しければ眼も離さず、貪婪國にも又かゝる氣ちがひはありけるよ、堅木の薪を一把そへて、生きたやうなる松魚を捨つるは、さりとは解せぬ奴、故こそあらめ聞かまほしと、心に深く怪しみけり、かゝる所に亦一人、六十あまりの染垂阿爺、天窓は藥罫と元げかゝやき、腰はゆがみて鍋の蔓、墨より黒き杓子顔吹竹程な杖の頭に、やつと掛けたる古草鞋を、よろ／＼として横町より、出合がしらに顔見合せ、これは藪坂の客平どの、どちへお出と呼びかくれば、いやあ無佐堀の皺右衛門どの、頃日は御無沙汰致した、われらこの處へ出かけしは、

據なく頼まれて、親類どもへ四五十金の、媒いたしつかはせしが、親類だけに禮金なども、慾を離れて並よりも、少し餘計に受納致せし、その謝禮として松魚一本、贈り下されて却つて厄介、之を煮て總菜にするときは、食はせつけぬ魚類にて、家内の奴原飯がすゝまば、一とかたの飯に損あり、又刺身にして自分ひとり賞翫しても、一本の松魚を食い盡くされず、所へ客でも來る時は、まんざらそれを見せてもおかれず、これもまた二三合の、酒の損することもあるべし。所詮薪一把の損をして、この松魚を捨つるにしかじ、薪あれば拾ふものは醤油一合の損なり、然らば取り上ぐる人も有るべしと思案して、わざ／＼捨てに來ましたと云へば皺右衛門眉を蹙め嗚呼貴様はそれほどに、大氣な人とは思はなんだが、よほど焼がまはらしやつた、頃日の相場では、捨てゝも五百がものはあるに、なぜさ

かな屋に賣らしやらぬ。われらは毎日麥飯のみ食ふ故に、屁の出る
と限なく、さればとて屁も徒らには放らず、氣をもらさんと思ふ時
は、紙袋へそつとすかして、直さま口をしつかり括り、これを青菘
に代へてやる。常の風には事かはりて、彼の袋の屁を畠へちらせば、
自然と菊こぎしになる道理、古草履踏切らして、惜氣もなくはき棄てる大
氣きものとは、日を同じくして語り難し。御覽あれ、さる方へ行きし
歸るさに、拾ひたる古草鞋、まだはかれるを擇り分けて、残りは簀
沙さにさらせるつもり。若し其松魚を捨てたまはゞ、われら直さま拾
ふべしと、いはれて頻りに天窓あまなをかき、なる程これは近年の大ぬか
り。元日から大晦日まで脛なまくさものを買はざれば、一向そこへ氣が付か
ず、貴公にこゝにて行きあはずば、小二朱の損をすべかりしに、さ
すがは老功感心く、いざ同道と打連れて、薪と松魚を又引提げ、
につこりともせず立かへる（下略）。

袋の贅

(横井也有)

器は容るゝものをして、おのが方圓に従はしめんとし、袋は入るゝ
ものに従ひて、おのが方圓を必とせず。實なる時は肩にあまり、虚
なる時は疊みて懐にかく、虚實の自在を知る。布の一袋、壺中の天
地を笑ふべし。

木履説

(全)

木履々々、笠は東坡が春の野かげの尻にしかるゝ折もあるべきに、
などや汝は夏の日の宰予が枕にも履はれざる。日和つゞきて隙なる
ときは椽の下に寝ころび、きりくすの霜夜にともない、又は座頭

の杖にさゝれて、日待の壁にぶらつきては、かたぶくまでの月をも見るらむ。たま／＼かるわざの綱渡りにはかれて、高みに人を見おろす事もあれど、常は沓ぬきにひざまづき、洗濯の日のこしかけとなりて、それより上の交は知らず。かく下さまのものながら、狩人の笛となりては、口にふかるゝためしも有とや。その鹿の命を断るは罪ふかき身の果なれど、佛も下駄もおなじ木のきれと、例の一體のしめしに逢て、はじめて輪廻の鼻緒はきれてん。抑も足高さものを木履足駄と號し、たけ低さを下駄といへるは、いづれも一體分身にしてこゝに尊卑の差別はあらねど俳諧の上に二つの姿を論ずべくば、ほくり／＼と静なるは雪降の朝にして、下駄々々といそがしきは雨の夕なるべし。

そこぬけ釜

(十遍舎一九)

宿に着き座敷に通る女柳行李三度笠を持來り床の間に置く北八「コレ女中煙草盆に火を入れて來てくれな」彌次「オヤ手前こめとんだ事を云ふもんだ」北八「なぜ／＼」彌次「煙草盆に火を入れたらこけてしまハア、煙草盆の中にある火入ひいれの内へ火を入れて來いと云ふもんだ」北八「エ、おめへも詞咎めをするもんだ。それじゃア日の短い時にやア煙草を吞まらずに居にやならねエ」彌次「時に腹が北山だ、今飯を焚く様子だ、埒のあかねへ」北八「コレ彌次さん、おいらよりや、おめへ文盲なもんだ」彌次「なぜ」北八「飯を焚いたら粥になつてしまはな、米を焚くと云へばいゝに」彌次「馬鹿アぬかせハ……（此内女煙草盆を持て來る）」

北八「モシ姉ねえさん湯がわいたら這はい入りませう」彌次「それや人の事を云

ふうぬが何にも知らねえな、湯も沸いたら熱くつて這入られるものか、それも水が湯にわいたら這入りやしようとなぬかしおれ』(此内又宿の女お湯がわきましたお召しなさいませ) 北八『オイ水がわいたか、ドレ這入やせう(トすぐに手拭をさげ風呂場に行て見るに此の旅籠屋の亭主上方ものと見へて、すへ風呂桶は上方にはやる五右衛門風呂と云ふ風呂なり土を以て釜をつき立て其上へ餅屋のとら焼を焼く如き、うすべらなる鍋をかけて其れに水風呂桶を置き廻りを湯の漏らぬ様に漆喰をもて塗り固めたる風呂なり是故湯をわかすに薪多分にいらす利方第一の水風呂なり此風呂は蓋と云ふ者なく底板下に浮いて居る故蓋の代りにもなりて早く湯のわく利方なり湯に入る時は底を下へ沈めて這入る。彌次郎此の風呂の勝手を知らねば底の浮いて居るをふたと心得、何心なく取て除け、ズツと片足を踏み込んだ

所が釜が直きにある故大きに足をやけどして肝をつぶし彌次『アツアツ』こいつはとんだ水風呂だ(といろく考へ、これはどうして這入るのだと聞くも馬鹿くしく外で洗ひなから、そこらを見れば雪隠のそばに下駄が有る故こいつ面白いと、彼は下駄をはきて湯の中に這入り洗つて居ると北八待かねて湯殿をのぞき見れば(悠々と淨瑠璃) 彌次『お半涙の露ちり程も……』 北八『エ、呆れらア、道理で長湯だと思つた、いゝ加減にあがらねえか』 彌次『コレ一寸おれが手をいじつて見て呉れる』 北八『なぜに』 彌次『もうゆだつたかしらん』 北八『いゝきせん(と座敷へ這入る此内彌次湯からあがり彼の下駄をかた影へ隠し、そ知らぬ顔にて 彌次『サア這入らねへか』 北八『どれ這入らふ(と早々裸になり一目散に水風呂に片足つゝこみ) 北八『アツ、くくく彌次さんく大變だ、ちよつと来てくん』 彌

次『騒々しい何だ』北八『コレおめへ此の風呂へはどうして這入た』
 彌次『馬鹿め水風呂へ這入るに別に這入りようがあるものか、足から
 先へドンブリコ、スコッコ』北八『エ、洒落れんな、釜がじきに有つ
 て是が這入れるものか』彌次『這入れりやこそ手前の見た通り今まで
 己れが這入つて居た』北八『おめへどうして這入つた』彌次『ハテしつ
 こい男だ、据風呂へ這入るのに、どうして這入つたとは何の事だ』
 北八『ハテ面倒な』彌次『むづかしい事アねへ初の内ちつと熱いのを辛
 抱すると後にはよくなる』北八『馬鹿ア云ひなせへ辛抱して居る内に
 や足が眞黒に焦げてしまハア』彌次『エ、埒の明かねへ男だ(と心の
 内は可笑しさこらへられず座敷へ歸る北八いろ／＼と考へ、そこら
 を見まはし彌次郎が隠して置いたる下駄を見付けてア、讀めたと心
 にうなづき直ぐに其下駄をはきて水風呂の内へ這入る)』北八『彌次さ

ん／＼』彌次『何だ又呼ぶか』北八『成程お前の言ふ通り、入りしめて
 見ると熱くはねへ、ア、善い心持だ。憐れなるかな石童丸ハツレレ
 ン／＼／＼(此内彌次郎あたりを見れば隠して置いたる下駄が無き
 故さて此奴見付けたなど可笑しく思て居る内北八さすがに尻が熱く、
 立たりすはつたり色々して餘り下駄にてグアタ／＼と踏みちらし終
 に釜の底を踏み抜きベツタリ尻餅をつきければ湯は皆流れてシウシ
 ウ／＼／＼北八『ヤア助け船／＼』彌次『どうした／＼ハ……(宿の
 亭主此音に驚き裏の口より湯殿に參り肝をつぶし)亭主『どうなさい
 ました』北八『イヤモウ命に別條はねへが釜の底がぬけてアイタ、ア
 イタ、(膝栗毛)』

高 砂 節 録

(謠 曲)

所は高砂の、尾上の松も年ふりて、老の波も寄りくるや、木の下陰に落葉かく、なるまで命なからへて、猶いつまでか生の松、それも久しき名所かな。

今こそ不審はるの日の、光やはらぐ西の海の、かしこは住の江、こゝは高砂。松も色そひ、春ものどかに、四海波しつかにて、國も治まる時つ風、枝を鳴らさぬ御代なれや。あひに相生の松こそめてたかりけれ。げにや、仰ぎても、言もあるかや。かゝる世に、住める民とてゆたかなる、君の恵ぞ有りがたき。

高砂や、この浦舟に帆を上げて、月もろともに出でしほの、波の淡路の鳥陰や、遠くなるをの沖すぎて、はや住の江に着きにけり。

安宅

(謡曲)

旅の衣は篠懸の、露けき袖やしをるらん。鴻門楯破れ都の外の旅衣、日もはるばるの越路の末、思ひやるこそ遙なれ。主従十二人、いまだ習はぬ旅姿、袖の篠懸露霜を、今日分けそめていつまでの、限もいさや白雪の、越路の春に急くなり。ときしも頃は二月の十日の夜、月の都を立ち出でて、これやこの行くも歸るも別れては、知るも知らぬも逢阪の、山隠す霞ぞ春は恨めしき。波路遙に行く舟の、海津の浦に着きにけり。東雲はやく明け行けば、淺茅色づく有乳山、氣比の海、宮居久しき神垣や、松の木の芽山、なほ行くさきに見えたるは。杣山人の板取に、河瀬の水の淺洲津や、末は三國の湊なる蘆の篠原波よせて、靡く嵐の烈しきは、花の安宅に着きにけり。

辨慶「御急ぎ候ふ程に見れば早安宅の湊に御着きにて候ふ。暫く此

所に御休みあらうするにて候ふ」判官「如何に辨慶唯今旅人の申して通りつるに、安宅の湊に新關を立て、山伏を堅く擇ぶところ申しつれ」辨慶「言語同斷の御事にて候ふものかな。さては御下向を存じて立てたる關と存じ候ふ。是れはゆゆしき御大事にて候ふ。まづ御傍にて暫く御談合あらうするにて候ふ」山伏「我れ等が心中には何程の事の候ふべき。唯打ち破つて御通りあれかしと存じ候ふ」辨慶「暫く。仰の如く此の關一ヶ所打ち破つて御通りあらうするは易き事にて候へども、御出て候はむずる行末が御大事にて候ふ。唯何ともして無異の義が然るべからうすると存じ候ふ」判官「ともかくも辨慶はからひ候へ」辨慶「畏つて候ふ。某きつと案じ出したる事の候ふ。我れ等を始めて皆皆につくい山伏にて候ふが、何と申しても御姿隠れ御座なく候ふ間、このままにては如何と存じ候ふ。恐れ多き申し事にて

候へども御篠懸をのけられ、あの強力が負ひたる笈をそと御肩に置かれ御笠を深深と召され、如何にもくたびれたる御體にて、我れ等より跡に引きさがつて御通り候はば、なかなか人は思ひもより申すまじと存じ候ふ」判官「實に是れは尤にて候ふ。さらば篠懸を取り候へ」辨慶「畏つて候ふ。さらば御立ちあらうするにて候ふ」

關守「如何に申し候ふ。山伏達の大勢御通りにて候ふ」富鷹「何と、山伏の御通りあると申すか、心得である。なうなう客僧達、是れは關にて候ふ」辨慶「承り候ふ。是れは南都東大寺建立のために國國へ客僧を遣はされ候ふ、北陸道をば此の客僧承つてまかり通り候ふ。まづ勧めに御入り候へ」富鷹「近頃殊勝に候ふ。勧めには參らうするにて候ふ。さりながら是れは山伏達に限つて留め申す關にて候ふ」辨慶「さて其の謂れは候ふ」富鷹「さん候ふ。頼朝、義經御中不和にな

らせ給ふにより、判官殿は奥秀衡を頼み給ひ十二人の作り山伏となつて御下向の由、其の聞き候ふ間、國國に新關を立てて山伏をかたく選び申せとの御事にて候ふ。さる間此所をば某承つて山伏を留め申し候ふ。殊に是れは大勢御座候ふ間、一人も通し申すまじく候ふ。辨慶「委細承り候ふ。それは作り山伏をこそ留めよと仰せ出だされ候ひつらめ、よも誠の山伏を留めよと仰せられ候ふまじ」關守「いや昨日も山伏を三人まで切つたる上は」辨慶「さて其の切つたる山伏は判官殿か」富樫「あらむつかしや問答は無益、一人も通し申すまじ」辨慶「さては我れ等をも是れにて誅せられ候はむずるな」富樫「中中の事」辨慶「言語同斷、かかる不祥なる所へ來かかつて候ふものかな。此の上は力及ばぬ事、さらば最後の勤を始めて尋常に誅せられうずるにて候ふ。皆皆近う渡り候へ」

辨慶「いでいで最後の勤を始めん」辨慶「それ山伏といつば、役の優婆塞の行義を受け」山伏「其の身は不動明王の尊容をかたどり」辨慶「頭巾といつば、五智の寶冠なり」山伏「ナニ因縁のひだをすゑて載さ」辨慶「九會曼陀羅の柿の篠懸」山伏「胎藏黑色のはばきをはさ」辨慶「さて又八目の草鞋は」山伏「八葉の蓮華を踏まへたり」辨慶「出て入る息にあうんの二字を稱へ」山伏「即身即佛の山伏を」辨慶「ここに討ちとめ給はん事」山伏「明王の照覽はかりがたう」辨慶「熊野權現の御罰の當らん事」山伏「立ちどころにおいて」辨慶「疑あるべからず」一回「唵阿毘羅啤欠」と數珠さらさらと押しもめば、富樫「近頃殊勝に候ふ。先に承り候ひつるは南都東大寺の勸進と仰せ候ふ間、定めて勸進帳の御座なき事は候まじ。勸進帳を遊ばされ候へ。是れにて聽聞申さうずるにて候ふ」辨慶「何と勸進帳を讀めと候ふや」富樫「中中

の事」辨慶「心得申して候ふ」
 本来勸進帳はあらばこそ、笈の中より往來の卷物一卷とりいだし、
 勸進帳と名付けつつ高らかにこそ讀み上げけれ。辨慶「夫れつらつら
 惟れば、大恩教主の秋の月は涅槃の雲に隠れ、生死長夜の長さ夢驚
 かすべき人もなし。爰に中頃帝おはします。御名をば聖武皇帝と名
 付け奉り、最愛の夫人に別れ、涕泣眼に荒く涙玉を貫く。思を善途
 に翻して盧舍那佛を建立す。かほどの靈場の絶えなむ事を悲しみて、
 俊乗坊重源諸國を勸進す。一紙半錢の奉財の輩は、此の世にては無
 比の樂ちかにほこり、當來にては數千蓮華の上に座せむ。歸命稽首敬つ
 て白す」と、天も響けと讀み上げたり。關の人人肝を消し、恐れを
 なして通しけり。富盛「急いで御通り候へ」辨慶「承り候ふ」
 關「如何に申し上げ候ふ。判官殿の御通りにて候ふ」富盛「如何に

是れなる強力とまれとこそ」山伏「すは我が君をあやしむは、一期の
 浮沈極りぬ」と、皆一同に立ち歸る」辨慶「ああ暫く、あわてて事を
 仕損すな。やあ何とてあの強力は通らぬぞ。富盛「あの強力が、ちと
 人に似たると申す者の候ふ程に、扱留めて候ふよ」辨慶「何と、人が
 人に似たるとは、珍しからぬ仰にて候ふ。扱誰れに似て候ふぞ」富
 盛「判官殿に似たると申す者の候ふ程に、落居の間留めて候ふ」辨慶
 「や、言語道斷、判官殿に似申したる強力めは一期の思出な。腹立
 たしや、日高くは能登の國まで差さうずると思ひつるに、わづかの
 笈負うて跡に下ればこそ人も怪しむなれ。總じて此の程、につくし
 につくしと思ひつるに、いで物見せてくれん」とて、金剛杖をおつ
 取つて散散に打擲す。富盛「近頃誤りて候ふ。はやはや御通り候へ」
 辨慶「先の關より、はやびやくん拔群に程隔たりて候ふ間、此所に暫く御休

みあらうずるてに候ふ。如何に中し上げ候ふ。さても唯今は餘りに
 難義に候ひし程に、不思議の働を仕り候ふ事、是れと申すも君の御
 運盡させ給ふにより、今辨慶が杖にも當らせ給ふと思へば、いよ
 いよあさましうこそ候へ」
 判宣「さては悪しくも心得ぬるものかな。唯今の機轉更に凡慮より
 爲すわざには非ず、唯天の御加護とこそ思へ。關の者ども我れを怪し
 み生涯限ありつる處に、とかくの是非に躊躇せずして唯眞の下人の
 如く、さんざんに打つて我れを助くる、是れ辨慶が謀に非ず、八幡
 の御託宣かと思へば忝くぞ覺ゆる。さらば」とて笈をおつ取り肩に
 うち懸け、虎の尾を履み毒蛇の口を遁れたる心地して、陸奥の國へ
 と下りける。

寺子屋

(菅原傳授手習鑑)

御臺若君諸共に、しやくり上げたる御涙。冥土の旅の寺入の、師
 匠は彌陀佛、釋迦牟尼佛。六道能化の弟子となり、賽の河原で砂手
 本、いろは書く子はあへなくも、ちりぬる命、是非もなや。あすの
 よたれか添乳せん。らむうゐ目みる親心。劔と死出のやまけこえ、
 あささゆめみし心地して、跡は門火にゑひもせず。京は故郷と立別
 れ、鳥部野さして連歸る。

政岡忠義

(伽羅先代萩)

「(上略)ヲ、出かしやつたく。そなたの命は出羽奥州、五十四郡
 の一家中、所存の臍を堅めさす、誠に國の礎ぞや。とは云ふものゝ
 可愛やな。君の御爲兼てより、覺悟は極めて居るからも、せめて人

らしい者の手にかゝつても死す事か、素性賤しい銀兵衛が女房づれの刃にかゝり、なぶり殺しを現在に、傍に見て居る母が氣は、どの様にあらう。どうあらう。思ひまはせば此程から、歌うた歌に、『千松が、七つ八つから金山へ、一年待て共まだ見えぬ。二年待て共まだ見えぬ』と。歌の中なる千松は、まつ甲斐あつて父母に、顔をば見せる事もあらう。同じ名のつく千松の、そなたは百年待つたとて、千年万年待つたとて、何の便たよりが有うぞいの。三千世界に子を持つた親の心は皆一つ。子の可愛さに、『毒なもの食うな』と云うて叱るのに、『毒と見えたら、試みて死んでくれい』と云ふ様な、どう慾非道な母親が、又と一人有るものか。武士の胤ひつりに生れたは、果報か。因果か。いぢらしや。死ぬるを忠義と云ふ事は、何時の世からの習はしど」と、こり固まりし鐵石心、さすが女の愚にかへり、人目なけ

ればふし轉まび、死骸にひしと抱きつき、前後不覺になげきしは、こ
とわり過ぎて道理なり。

別れの盃

(繪本太功記)

十次郎「さ、とかう云ふ内時刻がのびる。其鎧櫃よろいび爰へ〜。初はつ蕪わらわあ
い。あゝ。」さ、早う。時延びる程不覺の本。え、聞き分け無い」と叱られて、「いとしい夫の討死の、首出の物の具付けるのが、どう急がる物ぞいの」と、泣く〜取出す緋緘ひきんの、鎧の袖にふりかゝる、雨か涙の母親は、白木にかはらけ白髪はくはつのば、長柄の銚子蝶しやうてつ花形、首途かどを祝ふ慰斗昆布、結ぶは親と小手すなわて臈當なつあて、六具かたむる三々九度、此世の縁や割小ざね、猪首ぶたがしらに着なす鍬形くわがたの、あたりまばゆき出立は、爽さわなりし其骨柄ほねがら。祖母おばああ〜。天晴武者振勇まへむさしまし。高

名手柄みる様に、祝言と出陣との、一所の盃、さあく、早う。目出たいく。嫁御寮」と、喜ぶ程猶いやます名残。こんな殿御を持ちながら、是れが別れの盃かと、悲しさ隠す笑ひ顔、「随分も手柄高名して、せめて今宵は凱陣を」と、跡は得云ず、喰ひしはる、胸は八千代の玉椿、ちりて、はかなき心根を、察しやつたる十次郎、包む涙の忍びの緒、しぼり兼ねたる斗なり。哀を爰に吹き送る、風が持て来る攻太鼓。氣を取り直し、ツツ立上り、土いづれも、さらばく」といひすて、思ひ切つたる鎧の袖、行き方知れず成にけり。

夕顔棚

(同 上)

奥の佛間と湯殿口、入るや月漏る片庇。爰に刈り取る眞柴垣、夕顔棚のこなたより、現はれ出でたる武智光秀。「必定、久吉この内に、

忍び居ること究竟一。只一討」と氣は張弓、心はやたけ藪垣の、見越の竹をひつそぎ鎗。小田の蛙の啼く音をば、とめて敵に悟られじと、差足拔足窺ひ寄り、聞ゆる物音、心得たりと、突込む手練の鎗先に、「わつ」と玉ざる女の泣聲、合點行かずと引出す手負、眞柴にあらで眞實の、母のさつきが七轉八倒。光「やあこは母人か。死なしたり。残念至極」とばかりにて、さすがの武智も仰天し、只茫然たるばかりなり。

聲聞つけてかけ出る操。初菊諸共走り出で、「のお母様か情ない。此有様は何事」と、すがり歎けば、目を見開き、祖「歎くまいく。内大臣春長といふ主君を害せし武智が一類、かく成り果つるは理の當然。系圖正しき我家を、逆賊非道の名を穢す不孝者とも悪人とも、たとへかたなき人非人。不義の富貴は浮へる雲。主君を討て高名顔。

天子將軍に成つたとして、野末の小屋の非人にも、おとりしとは知らざるか。主に背かず親に仕へ、仁義忠孝の道さへ立たば、もつさう飯の切米も、百万石に増るぞや。己れが心只一つで、しるしは目前是を見よ。武士の命を断つ刃も多いに此やうな、引そぎ竹の猪つき槍。主を殺した天罰の、報いは親にも此通り」と、槍の穂先に手を掛けて、ゑぐり苦しむ氣丈の手負。妻は涙にむせかへり、「これ見給へ光秀殿。軍の首途にくれくも、お諫申した其時に、思ひ留つて給はらば、かうした歎きは、エ、マ有まいに。知らぬ事とは言ひながら、現在母御を手に懸けて、殺すといふは何事ぞ。せめて母御の御最期に、『善心に立歸る』と、たつた一言聞してたべ。拜むわいな」と手を合せ、諫めつ、泣いつ、一筋に、夫を思ふ恨泣き。操の鏡くもりなき、涙に誠あらはせり。

韻文之部

神武天皇御製

(日本書紀)

瀨都瀨都志

俱梅能故邏餓

介耆茂等珥

阿波赴珥破

介瀨羅毗苦茂苦

會廼餓毛苦

會禰梅屠那藝豆

于苔豆之夜莽務

瀨都瀨都志

俱梅能故邏餓

介耆茂等珥

宇惠志破餌介瀨

勾致弭比俱

和例破瀧輸例儒

宇智豆之夜莽務

過近江荒都時作歌

(柿本人麻呂)

韻	玉だすき	畝火の山の	檜原の	ひじりの御代ゆ
	あれましし	神のことく	とがの木	いやつきくに
	天の下	まろしめましを	そらにみつ	倭を置きて
	青によし	寧樂山を越え	いかさまに	おもほしめせか
	あまざかる	ひなにはあれど	いはゞしの	近江の國の
	さゝなみの	大津の宮に	天のした	まろしめしけむ
	すめろぎの	神の御言の	大宮は	此處ときけども
	大とのほ	こゝといへども	春草し	茂く生ひたる
	霞立つ	春日かされる	百しきの	大みやどころ
文				

見れば悲しも

反歌

樂浪の志賀の辛崎ささくあれど
 おほみや人の船まぢかねつ
 さゝなみの志賀の大わだよどむとも
 昔の人にまたもあはめやも

望不盡山歌一首并短歌

(山部 赤人)

天地之	分	時	從	神左備手	高	貴	寸
駿河有	布士能高嶺乎	天	原	振放	見	者	見
度日之	陰毛隱比	照月之	光毛	不見			

白雲母 伊去波伐加利 時自久會 雪者落家留
 語告 言繼將往 不盡能高嶺者。

反歌

田兒之浦從 打出而見者 眞白衣
 不盡能高嶺爾 雪波零家留

詠不盡山歌一首并短歌 (作者 不詳)
 奈麻余美乃 甲斐乃 國 打緣流 駿河能國與
 已知其智乃 國之三 中從 出立有 不盡能高嶺者
 天雲毛 伊去波伐加利 飛鳥母 翔毛不上

燎火乎 雪以滅 落雪乎 火用消通都
 言不 得 名 不 知 靈 母 座 神 香 聞
 石花海跡 名付而有毛 彼山之 堤有海會
 不盡河跡 人乃渡毛 其山之 水乃當知焉
 日本之 山跡國乃 鎮十方 座神可聞
 寶十方 成有山可聞 駿河有 不盡能高峯者
 雖見不飽香聞

反歌

不盡嶺爾

六月

零置雪者

十五日消者

其夜布里家利。

富士能嶺乎 ふじのねを 高見恐見 たかみかしこみ

伊去羽計 いけはばかり

天雲毛 あまぐも
田菜引物緒 たなびくものを

空に見つやまと島根にふたつなき

(僧 契 冲)

たからとなれる富士のしば山

ふじのねにのぼりてみれば天地は

(下河邊長流)

まだいくほども分れざりけり

富士のねのふもとを出て、行く雲は

(賀茂直淵)

あしがら山の峯にかゝれり

天の原てる日にちかきふじの根に

(橘 枝 直)

いまでも神代の雪はのこれり

富士のねは高きのみかは姿にも

(千家尊孫)

たちならぶべき山なかりけり

千たび見て千たびめづらし雲風に

(千種有功)

すがたさだめぬ富士の芝山

思子等歌一首

(山上憶良)

瓜食めば こどもおもほゆ

栗食めば ましてしぬばゆ

いづくより 來たりしものぞ

まなかひに もとなかゝりて

やすいしなさぬ

反 歌

しろがねも 黄金も玉も なにせむに まされる寶子にしかめやも

賀陸奥國出金詔書歌一首並短歌(大伴家持)

葦原の 瑞穂ぐにを

天降り しらしめしける

天皇の 神のみことの

御代重ね あまの日嗣と

しらしくる 君の御代く

しさませる 四方の國には

山河を 廣み厚みと

奉る みつきたからは

算へ得ず	盡しも兼ねつ	然れども	我が大君の
もろびとを	いざなひ給ひ	善きことを	はじめ給ひて
くがねかも	樂しけくあらむと	覺 <small>オモ</small> ほして	したなやますに
鳥が鳴く	東のくにの	陸奥 <small>ミチノク</small> の	小田なる山に
黄金 <small>クガネ</small> ありと	まうしたまへれ	御意を	あきらめたまひ
天地の	神あひうづなひ	すめろぎの	みたまたすけて
遠きよに	かゝりしことを	わが御代に	あらはしてあれば
食 <small>チ</small> す國は	榮えむものと	かひながら	おもほしめして
ものゝふの	八十伴のをを	まつろへの	むけのまにまに
老人も	めのわらはこも	しがねがふ	心だらひに
なでたまひ	をさめたまへば	こゝをしも	あやにたふとみ
うれしけく	いよゝ思ひて。		

大伴の	遠 <small>トホ</small> つ神祖 <small>カンオヤ</small> の	其の名をば	大久米ぬしと
おひもちて	つかへしつかさ	『海行かば』	みづくかばね
山行かば	草むす屍	大君の	へにこそ死なめ
かへりみは	せじ』とことだて	ますらをの	きよき其の名を
いにしへよ	いまのをつゝに	ながさへる	おやのこどもぞ
大伴と	佐伯 <small>サヘキ</small> の氏は	人のおやの	たつることだて
人の子は	祖 <small>オヤ</small> の名絶たず	大君に	まつろふものと
いひつげる	ことのつかさぞ	あづさゆみ	手にとりもちて
劔太刀	腰にとりはき	朝守 <small>アサモリ</small> り	ゆふの守りに
大君の	御門のまもり	我をおきて	また人はあらじと
いやたて	おもひしまさる	大君の	みことのさきを
きけばたふとみ。			

須賣呂伎能
波自由美乎
麻可胡也乎
於保久米能
佐吉爾多豆
山河乎
布美等保利
知波夜火流
麻都呂倍(波歟)奴
波吉伎欲米

可未能御代欲利
多爾藝利母多之
多波左美蘇倍豆
麻須良多祁乎乎
由伎登利於保世
伊波禰左久美豆
久爾麻藝之都都
神乎許等牟氣
比等乎母夜波之
都可倍麻都里豆

反歌

ますらをの心おもほゆ大君の

みことのささをさけばたふとみ。

大伴の遠つ神祖のおくつきは

しるくしめ立て人のしるべく。

すめろぎの御代さかえむとあづまなる

みちのく山にくがね花咲く。

喻族歌一首并短歌

(大伴家持)

比左加多能
多可知保乃

安麻能刀比良伎
多氣爾阿毛理之

安^あ吉^き豆^つ之^し萬^ま
可^か之^し婆^ば良^ら能^の
美^み也^や婆^ば之^し良^ら
安^あ米^め能^の之^し多^た
須^す質^め呂^ろ伎^ぎ能^の
都^つ藝^ぎ豆^て久^く流^る
加^か久^く佐^さ波^ば奴^ぬ
須^す賣^め良^ら弊^べ爾^に
都^つ加^か倍^へ久^く流^る
許^こ等^と太^た豆^て氏^て

夜^や萬^ま登^と能^の久^く爾^に乃^の
宇^う禰^ね備^び乃^の宮^{みや}爾^に
布^ふ刀^た之^し利^り多^た豆^て氏^て
之^し良^ら志^し賣^め之^し祁^け流^る
安^あ麻^ま能^の日^ひ繼^{つぎ}等^と
伎^ぎ美^み能^の御^み代^よ御^み代^よ
安^あ加^か吉^き許^こ已^こ呂^ろ乎^を
伎^ぎ波^ば米^め都^つ久^く之^し豆^て
於^お夜^や能^の都^つ可^か佐^さ等^と
佐^さ豆^づ氣^け多^た麻^ま敝^へ流^る

宇^う美^み乃^の古^こ能^の
美^み流^る比^ひ等^と乃^の
伎^ぎ久^く比^ひ等^と能^の
安^あ多^た良^ら之^し伎^ぎ
於^お煩^わ呂^ろ加^か爾^に
牟^む奈^な許^こ等^と母^も
大^{おほ}伴^{とも}乃^の
麻^ま須^す良^ら乎^を能^の等^と母^も
之^し奇^き志^し麻^ま乃^の
名^な爾^に於^お布^ふ等^と毛^も能^の乎^を

伊^い也^や都^つ藝^ぎ都^つ岐^ぎ爾^に
可^か多^た里^り都^つ藝^ぎ豆^て氏^て
可^か我^が見^み爾^に世^せ武^ぶ乎^を
吉^き用^よ伎^ぎ會^え乃^の名^な會^え
已^こ許^こ呂^ろ於^お母^も比^ひ豆^て
於^お夜^や乃^の名^な多^た都^つ奈^な
宇^う治^ぢ等^と名^な爾^に於^お敝^へ流^る
夜^や末^ま等^と能^の久^く爾^に
己^こ許^こ呂^ろ都^つ刀^た米^め與^よ
安^あ伎^ぎ良^ら氣^け伎^ぎ

都流藝多知 伊與餘刀具倍之 伊爾之敝由
 佐夜氣久於比豆 伎爾之會乃名會。

陳防人悲別之情歌一首并短歌（上毛野君）

大王の まけのまにく 防人に わが立ち來れば
 はしとばの 母のみことは 御裳の裾 つみあげ搔き撫て
 ちゝのみの 父のみことは たくづぬの 白鬚の上ゆ
 涙垂り なげきのたばく かこじもの たゞひとりして
 朝戸出の 悲しき我が子 あらたまの 年のをながく
 遇ひ見ずは 戀ひしくあるべし 今日だにも ことゞひせむと
 惜しみつゝ かなしびいませ 若草の 妻も子どもも
 をちこちに さはにかくみ居 春鳥の 聲のさまよひ

白妙の 袖なきぬらし たづさはり わかれがてにと
 引き留め 慕ひしものを 大王の みこと畏み
 玉梓の 道に出て立ち 岳のさき いたむるごとに
 よろづたび かへりみしつゝ はろくに 別かれしくれば
 おもふそら やすくもあらず こふる空 若しさものを
 うつせみの 世の人なれば たまさはる 命も知らず
 海原の かしこき路を 鳥づたひ い漕ぎ廻りて
 ありめぐり 我が來るまでに たひらけく 親はいまさぬ
 つゝみなく 妻は待たせと 仕江の あがすめがみに
 ぬさまつり 祈り申しも 難波津に 船を浮けすゑ
 やそかぬき かことゝのへて 朝びらき わは漕ぎてぬと
 家に告げこそ。

反歌

家人の祝ひにかあらむ平けく

舟出はしぬと親にまうさぬ

み空ゆく雲も使と人はいへど

いへづと遣らむたづき知らずも

家苞イハヅクにかひぞひりへる濱波は

いやしくくになかくよすれど

島かげにわがふねはてて告げやらむ

つかひをなみや戀ひつゝゆかむ

詠王昭君歌

(村田春海)

雪まじり あられ亂れて

よもすがら 北吹く風の

あらましき 夜床のうへに

つくぐと 枕そばだて

來し方を 思出づれば

人の世は ゆめなりけりな。

しづたまさき いやしきわれも

宮ひめと かずまへられて

をすの内に いつかれしよは

綾錦 袖に重ねて

白玉を かつらにしつつ

ますかゞみ 見るおもかげの

かぐはしき 花のゑまひを

われながら われとたのみて

大君の 惠のつゆし

あまねくば もれじとこそは

思ひつゝ ありけるものを

さがなきや ふでにまかする

うつしゑの あらぬすすさみの

いつはりを たゞしもあへぬ

うきふしは せんすべをなみ

言ひ知らぬ 國の堺に

はるぐと 出立つ道に

あきそはる 袂の露の

消えかへり ひきとどめたる

駒の上に しばしかきなす